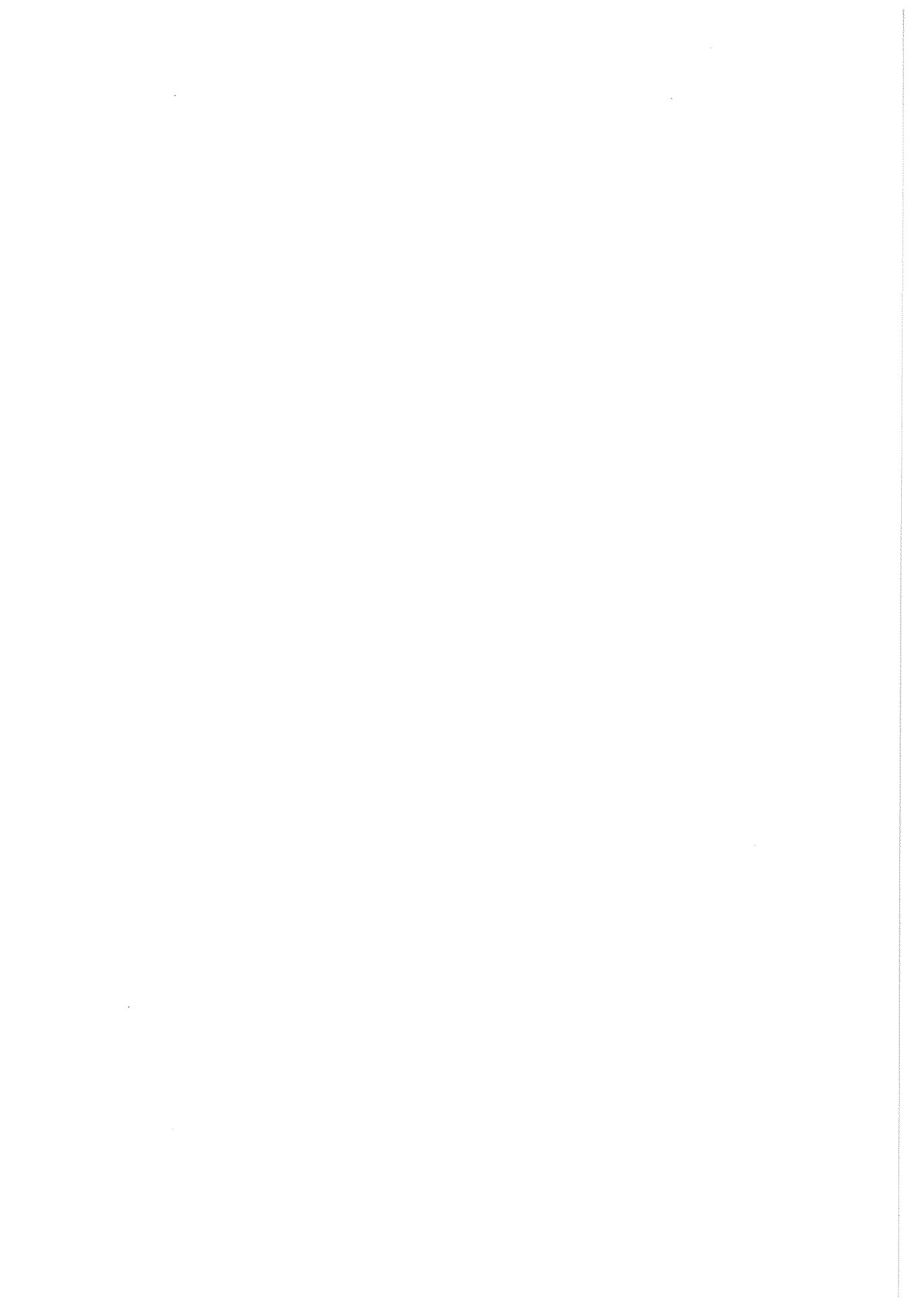


西岡台貝塚

宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集

1985

熊本県宇土市教育委員会



序

宇土市内に在ります轟貝塚・曾畑貝塚は、明治・大正の頃からよく知られた全国的にも著名な貝塚であります。そのため、京都大学・慶応大学を始めとして数多くの研究者によって発掘調査が実施されており、両貝塚の重要性については、ここで改めて説明するまでもありません。

ところが出土遺物は地元に残っており、当地を訪れる数多くの研究者・学生・愛好者の人達をがっかりさせているのも事実で、建設が期待されている資料館・博物館には、両貝塚を始めとして市内から出土している遺物や資料の収集も重要な点です。

今回、農業用排水路工事に伴って実施しました発掘調査で、縄文時代前期から中期の頃に作られたドングリの貯蔵穴が検出され、当時のドングリがそのままのかたちで多量に発見され、私達を驚かせました。この調査によって縄文時代の人達の食料の一部が明らかになったことは重要で、調査は予想以上の成果をあげる事が出来ました。

この調査は12月から1月の例年になく厳寒の最中に行う事になり、朝最初の作業が貯蔵穴の氷割りに始まるという厳しいものであったにもかかわらず真剣に作業に当たられた地元の方々を始めとして、調査の実施に当たって指導・協力を賜りました各位、更には御多忙な中をドングリ類の分析を行いそれについての玉稿をいただきました渡辺誠先生に厚くお礼申し上げる次第です。

昭和60年3月

宇土市教育委員会
教育長 船田 至

例 言

1. 本書は、昭和58年度に実施した宇土市神馬町^{しんめ}字西平^{にしおくだい}に所在する西岡台貝塚の発掘調査報告書であり、宇土市農政課による農村総合整備モデル事業による農業用排水路改修工事に伴う緊急発掘である。
2. 調査は宇土市教育委員会が、別記（第I章第3節）したような調査の組織によって実施したものである。調査の実施にあたっては、多くの方々の指導・協力があり、これによって調査を円滑に進めることができた。
3. 実測図で用いたレベルは海拔標高である。
4. 遺構の実測・写真撮影は高木恭二・木下洋介・古城史雄が行ない、遺物のうち石器の実測は豊崎晃一が、土器の実測は清田純一がそれぞれ行なった。
5. 出土した堅果類の分析を名古屋大学文学部の渡辺誠助教授にお願いし、その分析結果についての玉稿を第III章4に掲載させていただいた。
6. 本書の執筆は渡辺・豊崎・清田・高木・木下が、図・表の作成は主に高木・木下・古城が行ない。編集には高木・木下があたった。
7. 出土遺物、その他関係資料については宇土市教育委員会が保管している。

本文目次

I 序 説	1
1. はじめに	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の組織	3
II 位置と環境	4
III 発掘調査	9
1. トレンチの設定	9
2. 遺構	9
3. 出土遺物	23
4. 植物遺体	47
IV まとめ	52

挿図目次

第1図	宇土半島基部縄文時代遺跡分布図	5	第12図	4・5号貯蔵穴実測図	20
第2図	轟貝塚・西岡台貝塚位置図	7	第13図	湧水の流れ概念図	21
第3図	地形測量図	8	第14図	出土土器実測図(1)	24
第4図	5 T南壁土層断面図	10	第15図	出土土器実測図(2)	25
第5図	5 T北壁土層断面図	10	第16図	出土土器実測図(3)	26
第6図	9 T土層断面図	11	第17図	出土土器実測図(4)	27
第7図	3 T南側崖面土層断面図	12	第18図	出土石器実測図(1)	39
第8図	5 T遺構配置図	13	第19図	出土石器実測図(2)	40
第9図	1号貯蔵穴実測図	15	第20図	出土石器実測図(3)	41
第10図	2号貯蔵穴実測図	18	第21図	出土石器実測図(4)	42
第11図	3号貯蔵穴実測図	18	第22図	出土石器実測図(5)他	43

図版目次

図版1	5 T遺構検出状況(表紙)		図版10	3号貯蔵穴	17
図版2	西岡台貝塚遠景	4	図版11	4号貯蔵穴	19
図版3	西岡台貝塚空中写真	6	図版12	5号貯蔵穴	19
図版4	5 T遺構検出状況1	14	図版13	5号貯蔵穴	19
図版5	5 T遺構検出状況2	14	図版14	出土土器1	28
図版6	1号貯蔵穴	16	図版15	出土土器2	29
図版7	1号貯蔵穴植物遺体出土状況	16	図版16	出土土器3	30
図版8	1号貯蔵穴工具痕	16	図版17	出土石器他	44
図版9	2号貯蔵穴	17	図版18	出土植物遺体	51

表目次

第1表	貯蔵穴一覧表	22	第4表	出土石器・その他の遺物観察表	45
第2表	出土土器観察表	31	第5表	種子類数量表	49
第3表	層別出土遺物対照表	36	第6表	ドングリ類の分類	50

I 序 説

1. はじめに

西岡台貝塚は宇土市神馬町字西平に位置し、国指定史跡宇土城跡の一角にあたる。著名な轟貝塚は西方約60mの至近距離に位置し、早くから当貝塚の存在は知られていた。大正9年発行の京大報告第5冊⁽¹⁾に於いてもふれられ、これまで昭和49年1月の熊本県教育委員会⁽²⁾、昭和51年3月の宇土市教育委員会⁽³⁾の二度の確認調査が実施されている。

市教育委員会による確認調査では貝の分布と遺構の広がり把握のための試掘調査を実施し、併せて貝層断面の4層にわたるブロックサンプリングをも行なった。その分析は山崎純男氏の協力のもとに実施したものであるが、この作業に先立って山崎氏は当貝塚の貝類の分析結果を明らかにされている⁽⁴⁾。これらの貝類の分析は縄文時代における当貝塚人の食生活と自然環境を考える上で貴重な成果を提供することになった。

この貝塚の一部に、農村総合整備モデル事業による農業用排水路改修工事に伴って、「土木工事等による発掘通知書」と「現状変更許可申請書」が提出されたのは昭和58年11月24日であった。

工事計画によると貝塚の西端を流れ、指定境となっている用水路166.4mをコンクリートブロック積み三方張に変えるというものであり、隣接する貝塚の掘削をも実施せざるを得ないというものであった。

今回の調査では、設定したトレンチのうちT5トレンチから堅果類の貯蔵穴5基を検出することが出来、遺構の広がりを推測させた。また、これによって当時の人々の植物質食料の一端を明らかにすることができ、前回の貝類の動物質食料の成果と併せ、当時の食料の一部を明らかにすることができた意義は大きい。

註

- (1) 浜田耕作・榊原政職「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第5冊、1920年。
- (2) 緒方勉「轟貝塚（西岡台）の調査」『ふるさとの自然と歴史』第35号、1974年。
- (3) 平山修一・高木恭二ほか「宇土城跡（西岡台）」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第1集、1977年。
- (4) 山崎純男「九州地方における貝塚研究の諸問題—特に自然遺物（貝類）について—」『九州考古学の諸問題』東出版、1975年。
(高木)

2. 調査の経過

今回の発掘調査は、昭和58年12月5日に開始し、翌年の昭和59年2月1日に終了した。その間約2か月、実質35日を費した。

昭和58年

- 12月5日 発掘機材を搬入し、調査を開始する。午後から基準点を設定する。
- 12月6日 調査区全体の草刈りを行い、T1の発掘に着手する。
- 12月7日 T5を設定（8m×1m）。
- 12月8日 T5の発掘。硬化面までは、縄文や中世の遺物が混在している。
- 12月9日 T1の清掃、写真撮影。
- 12月10日 T1の土層断面実測。
- 12月12日 T9の発掘を開始する。（～16日）
- 12月19日 貝層断面実測。
- 12月20日 T5の硬化面を掘り下げる。
- 12月21日 T5からドングリと木葉、枝が出土（1号貯蔵穴）。
- 12月22日 T5の北側土層断面実測（～23日）。
- 12月26日 2号貯蔵穴を検出。
- 12月27日 1号貯蔵穴の土層断面実測。熊本県文化財保護審議委員、熊本県文化課職員来訪。
- 12月28日 機材の整理。

昭和59年

- 1月9日 貝層とT9を埋め戻す。
- 1月10日 T5拡張（4m×6m）。肥後考古学会会長来訪。
- 1月11日 T5遺構面の清掃と2号貯蔵穴の土層断面実測。宇土市文化財保護審議委員来訪。
- 1月12日 T5西側溝状の落ち込みを掘り始める。熊本大学文学部助教授・学生来訪。
- 1月13日 3号・4号貯蔵穴を確認。
- 1月17日 溝状の落ち込み北側部分を掘り始める。
- 1月18日 遺物の出土状態の実測。熊本商科大学・短期大学文化財研究会来訪。
- 1月23日 溝状の落ち込み南側部分完掘。
- 1月24日 5号貯蔵穴を確認。
- 1月25日 1号・2号貯蔵穴内の石材出土状態の実測、写真撮影。
- 1月26日 1号貯蔵穴内の発掘に取り掛かる。
- 1月27日 2号貯蔵穴内の発掘に取り掛かる。
- 1月28日 1号貯蔵穴出土の木葉・幹を取り上げる。2号・4号・5号貯蔵穴を完掘する。
- 1月29日 1号・3号貯蔵穴完掘。縄文研究会来訪。
- 1月31日 T5遺構の清掃・写真撮影・実測を行う。
- 2月1日 前日に引き続き実測を行い、調査が終了する。（木下）

3. 調査の組織

調査主体 宇土市教育委員会

教 育 長 船 田 至

社会教育課長 本 郷 裕 幸

文化係長 一 宗 雄

調 査 担 当 高 木 恭 二

木 下 洋 介

調 査 補 助 古 城 史 雄

調査指導・助言

富 樫 卯 三 郎 (熊本地名研究会会長)

三 島 格 (肥後考古学会会長)

白 木 原 和 美 (熊本大学文学部教授)

甲 元 眞 之 (熊本大学文学部助教授)

渡 辺 誠 (名古屋大学文学部助教授)

限 昭 志 (熊本県教育庁文化課)

緒 方 勉 (//)

横 尾 泰 宏 (//)

島 津 義 昭 (//)

安 達 武 敏 (//)

豊 崎 晃 一 (城南町歴史民俗資料館)

清 田 純 一 (//)

熊本県教育委員会

熊本大学考古学研究室

熊本商科大学・短期大学文化財研究会

熊本県文化財保護審議委員会

宇土市文化財保護審議委員会

縄 文 研 究 会

調査協力

松 村 建 設 (資)

吉 野 商 会

堀 内 耕 (宇土市議会議員)

宇 土 市 役 所 水道課 耕地課

II 位置と環境

九州の西側に大きく弯入している有明海沿岸には数多くの縄文時代貝塚が分布し、熊本県の中央部に広がる熊本平野・宇土半島基部・八代平野の一带も例外ではない。そして、その地域の縄文時代研究の歴史は古く、明治前期のE・S・モースの熊本県八代郡竜北町大野貝塚発掘に端を発する。

宇土半島基部一帯の縄文時代遺跡は、第1図に示すごとく宇土市の西岡台貝塚・轟貝塚・馬場遺跡・曾畑貝塚・古保里貝塚・山内遺跡、不知火町の嫁坂遺跡、松橋町の大野貝塚・宮島貝塚・曲野遺跡・上の原遺跡、富合町ソビエ石貝塚などであり、12箇所を数える。熊本平野をやや奥まった城南町になると阿高貝塚・黒橋貝塚・御領貝塚・敷田貝塚・沈目遺跡などがあるが、ここに挙げた以外の小遺跡をあげればかなりの数にのぼることになる。

これらの遺跡の多くは長期間にわたって形成されたものであり、その形成時期を限定することは必ずしも適当ではないが、九州の縄文土器編年の標式土器を設定している遺跡がいくつかある。早期の沈目式土器、前期の轟式土器・曾畑式土器、中期の阿高式土器、後期の御領式土器などがそれで、それらの多くは九州一円に分布する。

西岡台貝塚は、宇土半島基部に形成された小平野の西側の一独立丘陵の一画に存在し、水田を挟んだ西方約60mのところ轟貝塚がある。この独立丘陵は、中世における宇土城として利用されたために地形の改変が著しく、縄文時代当時の地形はあまりとどめていないと思われる。

行政的には宇土市神馬町字西平に属し、独立丘陵西北隅一帯の標高5m~12mにわたって貝の散布をみることができる。なお、当貝塚の名称については「西岡台貝塚」と呼ぶのが一般的であり本書においてもそのように取り扱っているが、昭和40年代の後半から50年代前半にかけて「轟貝塚（西岡台地区）」⁽¹⁾⁽²⁾として用いたこともある。

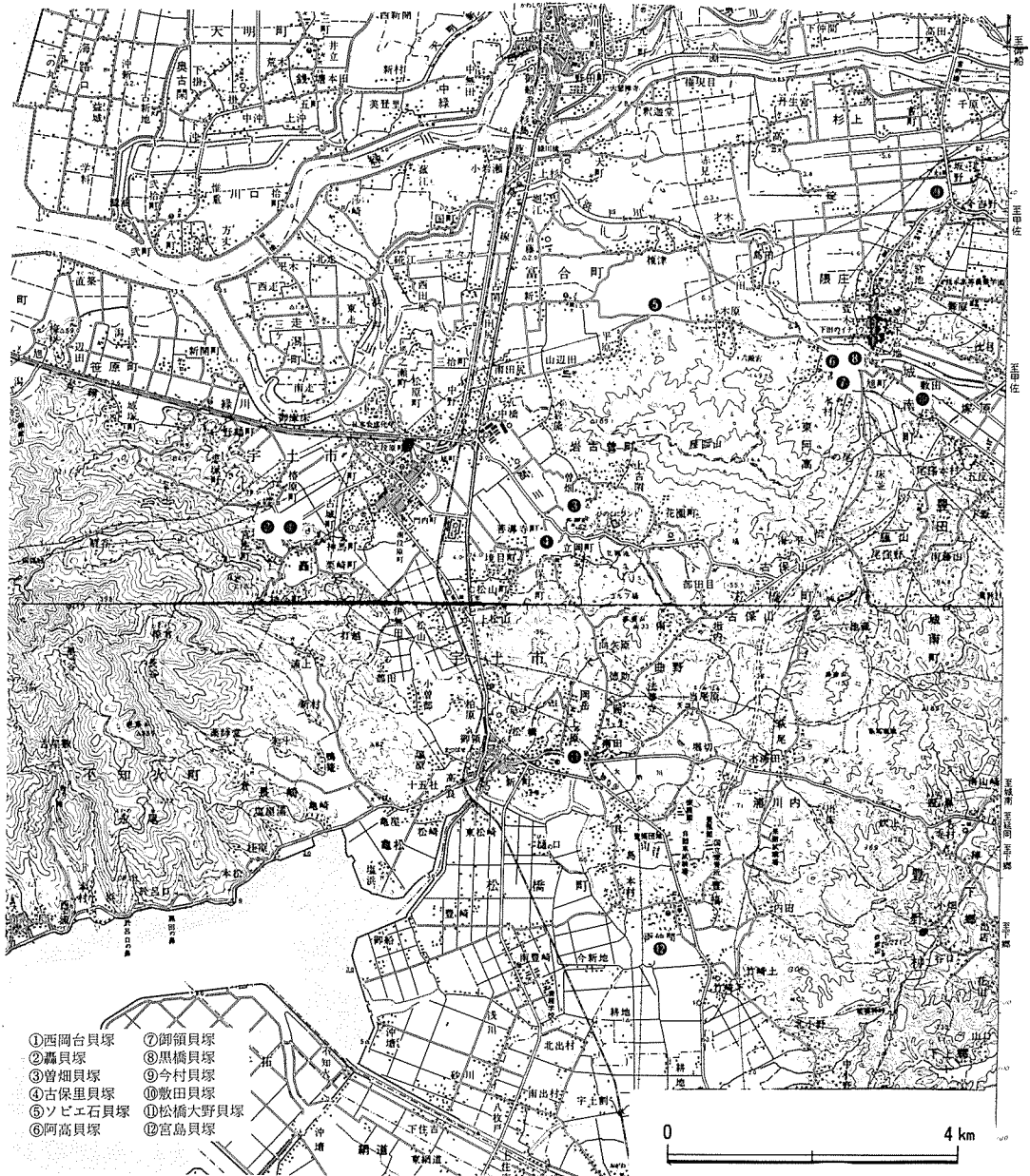
(高木)



図版2 西岡台貝塚遠景

註

- (1) 緒方勉「轟貝塚（西岡台）の調査」『ふるさとの自然と歴史』第35号、1974年。
- (2) 平山修一・高木恭二ほか「宇土城跡（西岡台）」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第1集、1977年。



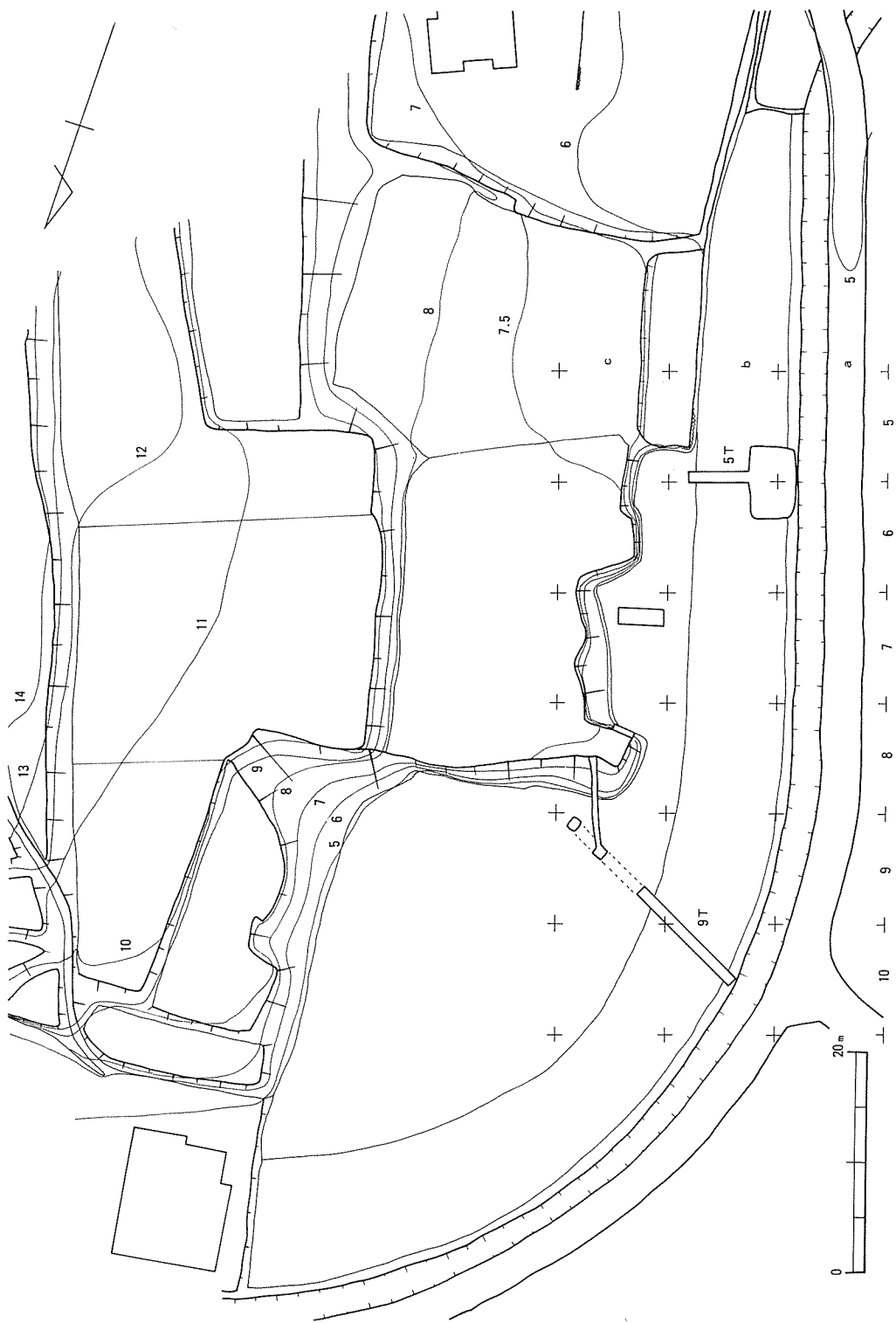
第1図 宇土半島基部縄文時代遺跡分布図 (1:100,000)
 (国土地理院発行の熊本・八代 (1:50,000) を縮少使用)



図版3 西岡台貝塚空中写真



第2図 轟貝塚・西岡台貝塚位置図



第3図 地形測量図 (1/600)

III 発掘調査

1. トレンチの設定

用水路掘削に伴う発掘調査ではあるが、現存水路には水が流れているため水路部分の調査を行うことは不可能であり、貝層のひろがる東側に限ってトレンチを設定することとした。トレンチ設定に先立ち、水路に沿って南北方向に1～10、東西方向にA～Cグリッドを設けた。

トレンチは、台地側から水路ぎりぎりに3か所、北側崖面に露出している貝層のひろがり・深さを確認するために3か所、計6か所に設定した。

1 Tは、水路ぎりぎりの3-A・Bグリッドに1 m×2 mを設定。

5 Tは、当初、5-Bグリッドに1 m×8 mで設けたが、遺構の検出に伴い北側に3 m×4 mを、南側に2 m×4 mをそれぞれ拡張した。

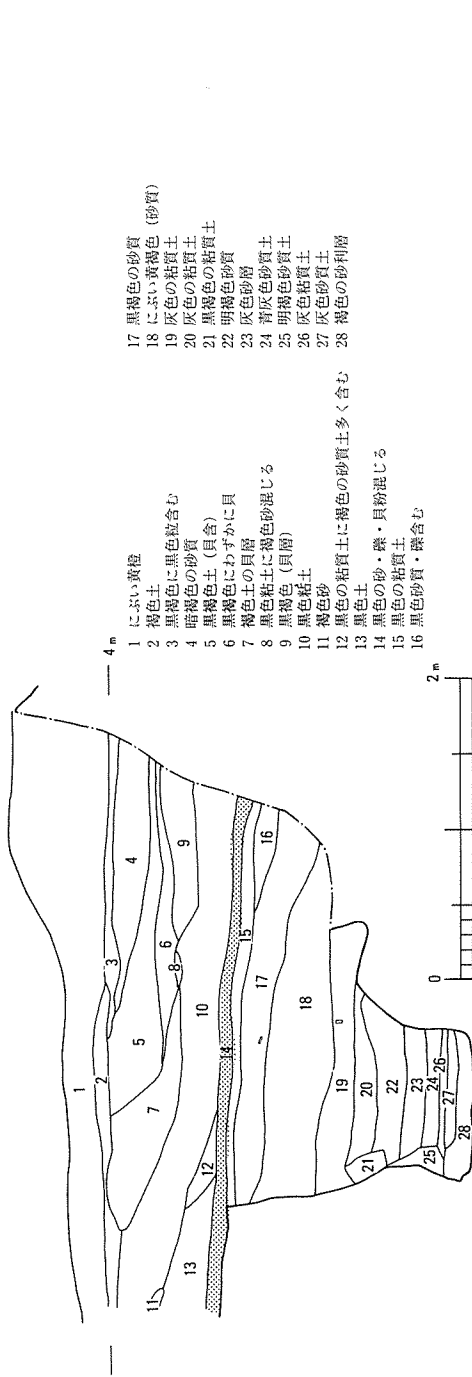
9 Tは、9-Cグリッドから10-Bグリッドにかけての45°方向に1 m×12 mを設定し、その南東方向2か所に1 m×1 mを設定した。そのうちの1か所からは崖面の貝層に向けて50 cm×8 mを設定した。(木下)

2. 遺 構

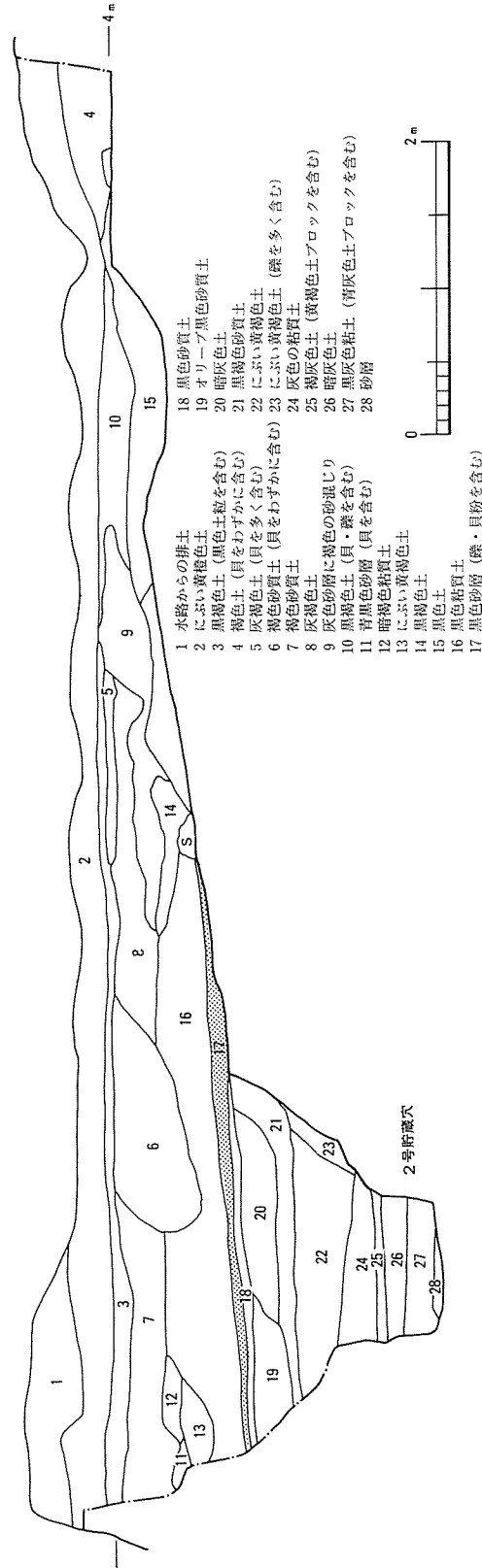
(1) 土 層

① 5 Tの土層

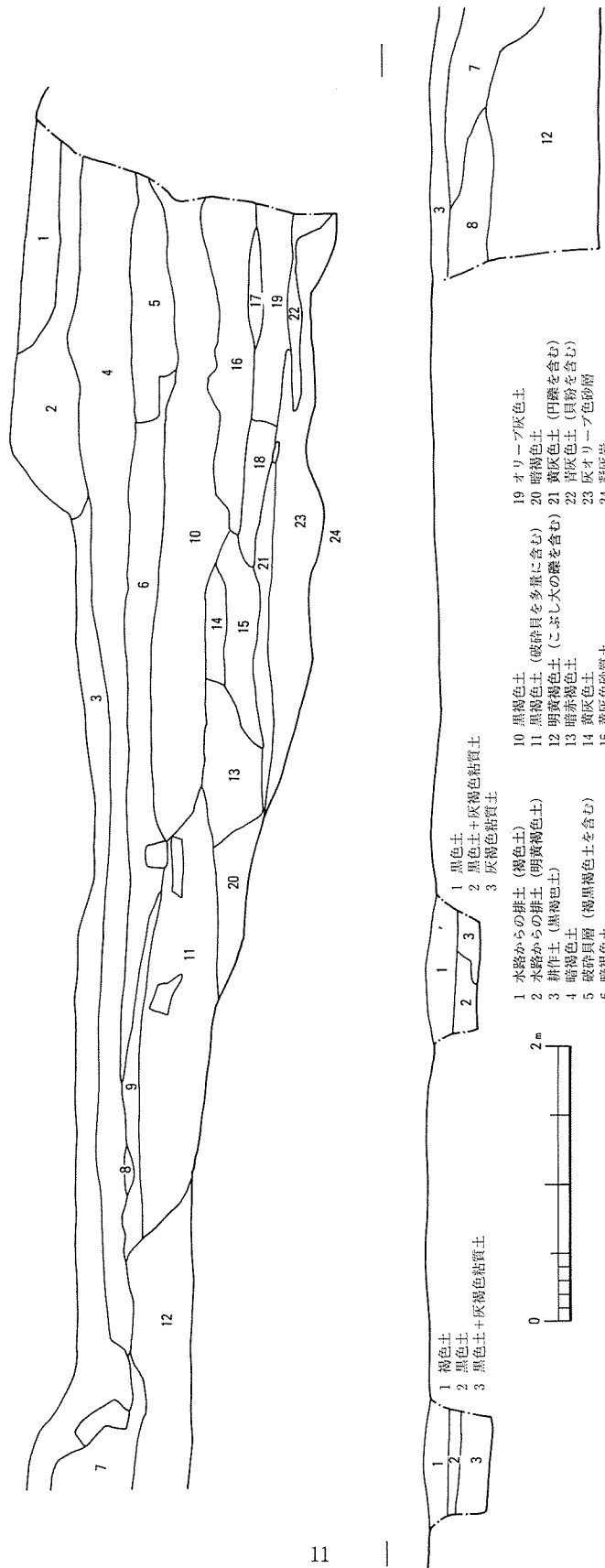
5 Tの層位は、大別すれば3群に分けることができる。それを仮に上・中・下層とし、第5図の土層断面図で見れば、1層から14層までが上層、15層から18層までは中層、19層から23層までが下層である。また、第6図の断面図では、1層から17層までが上層、18層から23層までが中層、24層から28層までが下層に該当する。上層と中層を分かち層は、砂と貝粉で固くしまっていて、第5図で14層、第6図で17層にあたる。上層は、中世以降の堆積層で縄文と中世の遺物が混在している。中層は、貯蔵穴を埋めた下層と上層との間の層であり、各層共レンズ状に堆積している。この層から出土する遺物は、ほとんど破片で時期的にもややバラツキがあるようである。唯一復原できた土器（遺物番号58）は、この層の上位からの出土である。下層は、貯蔵穴内の層である。また、地山は上から、礫層、粘質土に砂を多量に含む層、阿蘇熔結凝灰岩層となっている。上から2層目は透水層で、貯蔵穴はこの層を掘り込んでいて、3層目の凝灰岩層は地下水を透過しにくい層であるため、2層目から湧水を得ることができる。



第4図 5 T南壁土層断面図 (1/50)

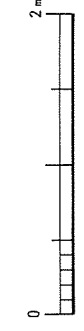


第5図 5 T北壁土層断面図 (1/50)



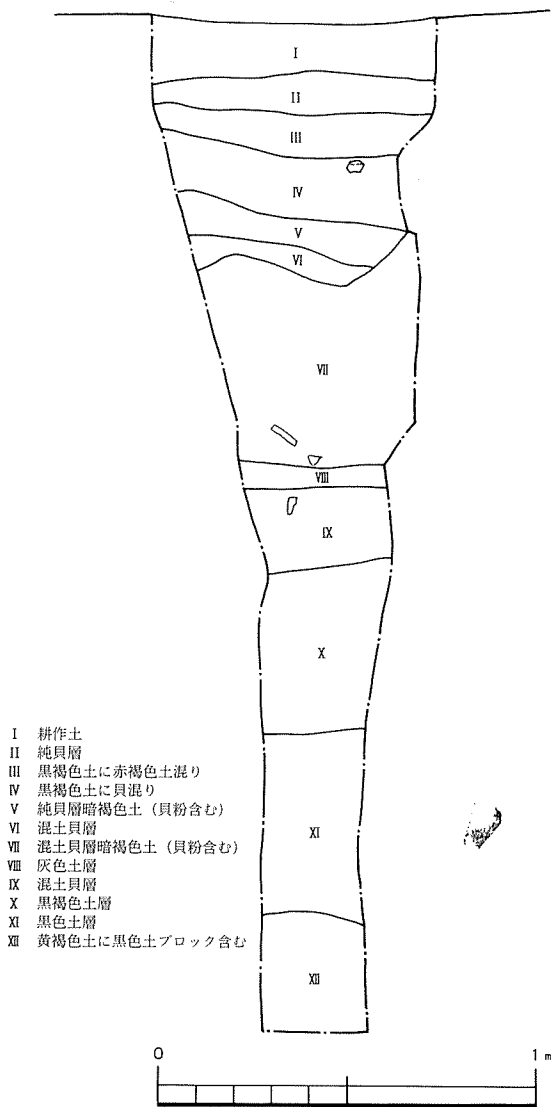
1 褐色土
2 黒色土
3 黒色土+灰褐色粘質土

1 黒色土
2 黒色土+灰褐色粘質土
3 灰褐色粘質土



- 1 水路からの排土 (褐色土)
- 2 水路からの排土 (明黄褐色土)
- 3 耕作土 (黒褐色土)
- 4 暗褐色土
- 5 破砕貝層 (褐黒褐色土を含む)
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土 (破砕貝を含む)
- 8 浅黄色土
- 9 にぶい黄橙色砂層
- 10 黒褐色土
- 11 黒褐色土 (破砕貝を多量を含む)
- 12 明黄褐色土 (こぶし大の礫を含む)
- 13 暗赤褐色土
- 14 黄灰色土
- 15 黄灰色砂質土
- 16 明灰黄色土
- 17 オリリープ灰土 (小礫を含む)
- 18 オリリープ灰土に褐色土混り
- 19 オリリープ灰土
- 20 暗褐色土
- 21 黄灰色土 (貝殻を含む)
- 22 黄灰色土 (貝殻を含む)
- 23 灰オリリープ色砂層
- 24 凝灰岩

第6図 9 T土層断面図 (1/50)



第7図 3 T南側崖面土層断面図 (1/20)

② 9 Tの土層

9 Tの岩盤は、阿蘇熔結凝灰岩で台地側から外方へ緩やかに下っている。この上部に堆積し、貝又は貝粉を含む層はブロック状になっており、出土する遺物も縄文・中世の土器などが混在していて、中世以降に堆積したものと思われる。5 Tの層と対比すれば、第5図の14層が凝灰岩に対応していて、上層つまり9 Tの全部の層が、第5図の1層から13層に対応するものと思われる。

③ 貝塚の土層

貝断面の地表下40cmのところから青磁が出土した。これは4層の黒褐色土に貝混じり層に含まれていて、上位の第2層は純貝層だが縄文時代に形成した貝層ではない。その原因として、背後の台地が中世に城郭として利用されているので、その時期に改変されたためと思われる。また、5層以下には貝層が3枚、最下層12の下には1～2枚程の層があり、9 Tで検出した凝灰岩層に達すると思われる。

(2) 遺構

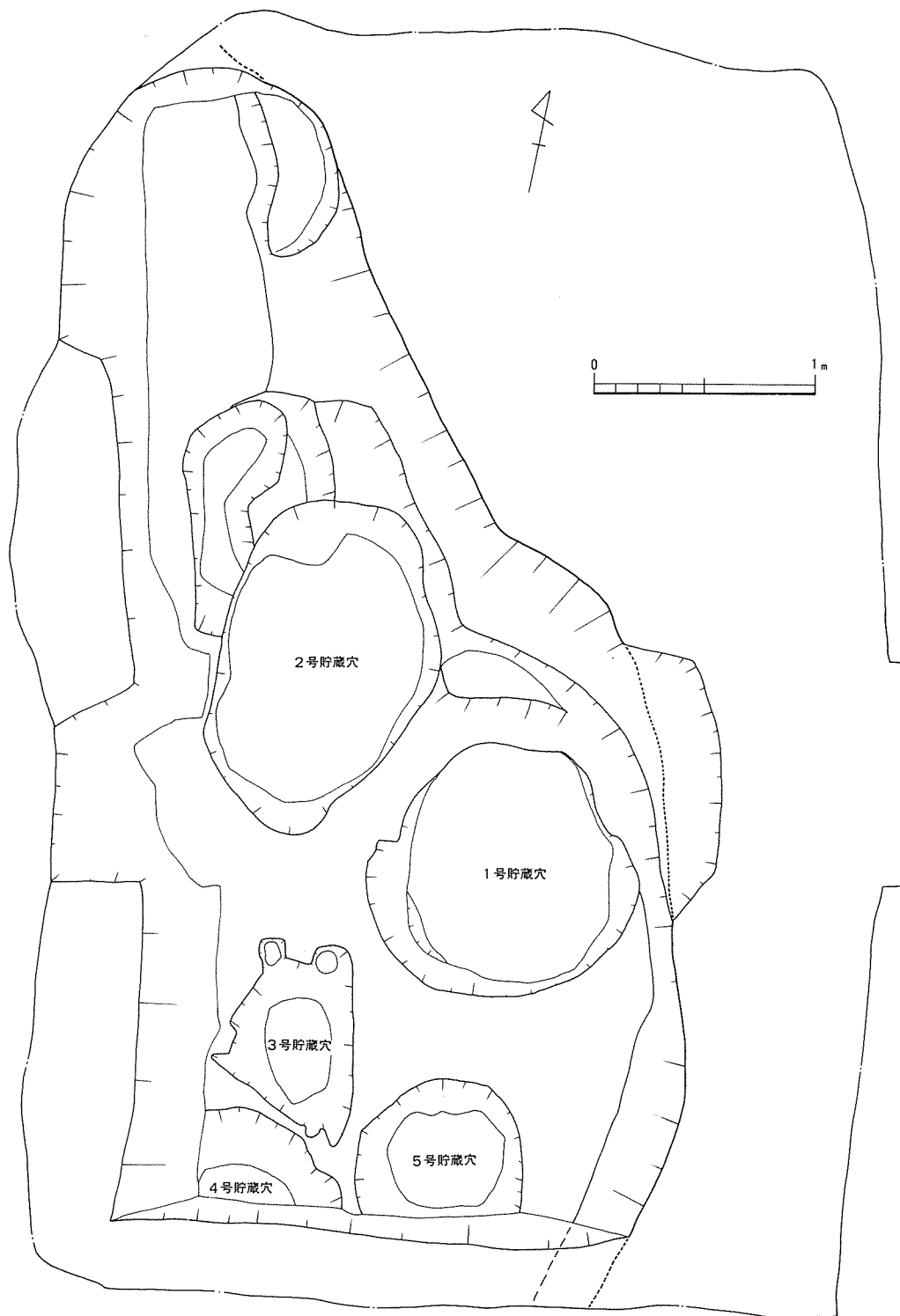
① 遺構配置

調査で確認した遺構は、5基の貯蔵穴とその上部の溝状の落ち込みがある。落ち込みは、南北方向から北西方向へ緩やかに湾曲しており、最も台地側へ入り込んだ部分である。

貯蔵穴は、この最も入り込んだ位置にあり、最も奥まった地点に1号貯蔵穴があり、その北西に2号貯蔵穴、3号から5号貯蔵穴はやや小型で1号貯蔵穴の南側に密集している。これらは、互いに切り合いはなく、壁の厚さも6cm～20cmと非常に薄い。

② 1号貯蔵穴

1号貯蔵穴は、底径110cm～119cmを測り、平面形は円形である。また底から48cmの位置でく



第8図 5 T遺構配置図 (1/30)



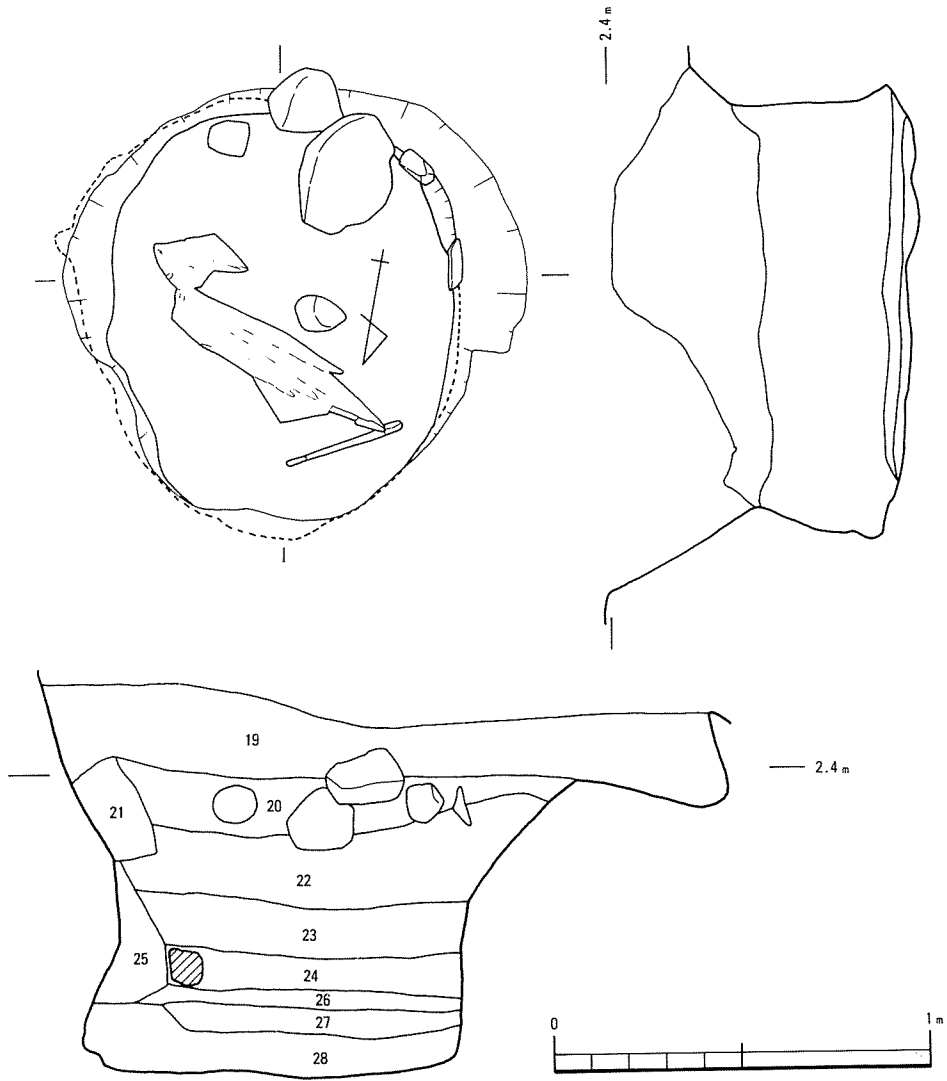
図版4 5 T遺構検出状況1

びれており径91cm~106cmを測り、さらに上部はラッパ状に開き、上面で径122cm程である。深さは、77cmを測り、断面は袋状を呈する。底の標高は海拔1.6mで、平坦である。貯蔵穴は軟質な透水層を掘り込んでいて、底は凝灰岩層の上面に達している。周壁には、工具痕が残っていて、工具は円柱状を呈するものと思われる。貯蔵穴内の様子は、底から45cm~80cmの地点に石が数個ある。ドングリは、底から20cm~30cmの間に密集し、それに混じって木製品の一部（遺物番号41）と木葉・木枝・幹なども出土、幹で最大のものは長さ80cm、径約15cmを測るものもある。

貯蔵穴内の層は、19・20・22層が石を含む層で、23・24層にドングリが多く含まれ、特に24層はドングリを多量に含んでいて、下位



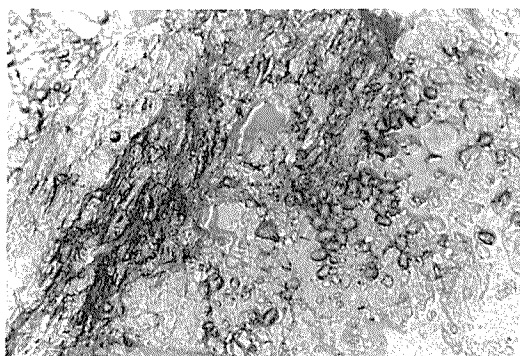
図版5 5 T遺構検出状況2



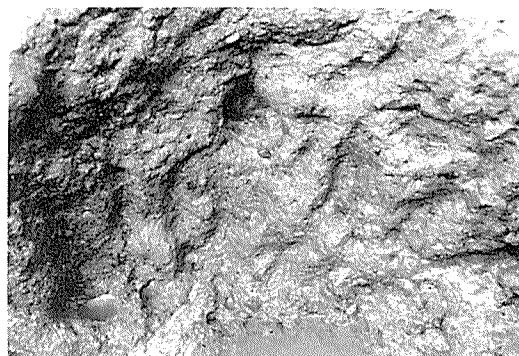
第9図 1号貯蔵穴実測図 (1/20)



图版6 1号貯藏穴



图版7 1号貯藏穴植物遗体出土状况



图版8 1号貯藏穴工具痕

に木葉・枝が多い。26層以下にはドングリもほとんど含まず、28層は底に堆積した小粒の礫層である。

③ 2号貯蔵穴

2号貯蔵穴の平面形は、南北方向に長い楕円形を呈し、長軸方向121cm、短軸方向90cmを測る。深さは70cmを測る。底は、平坦で標高1.77mである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。穴内の層は、5層に分けられ、24層に石を含む。26層からドングリが出土し始め、27層の下位に多く残っている。最下層の28層は、砂層である。石は、底から45cm～70cmの間にあり、他に比べ小ぶりである。

④ 3号貯蔵穴

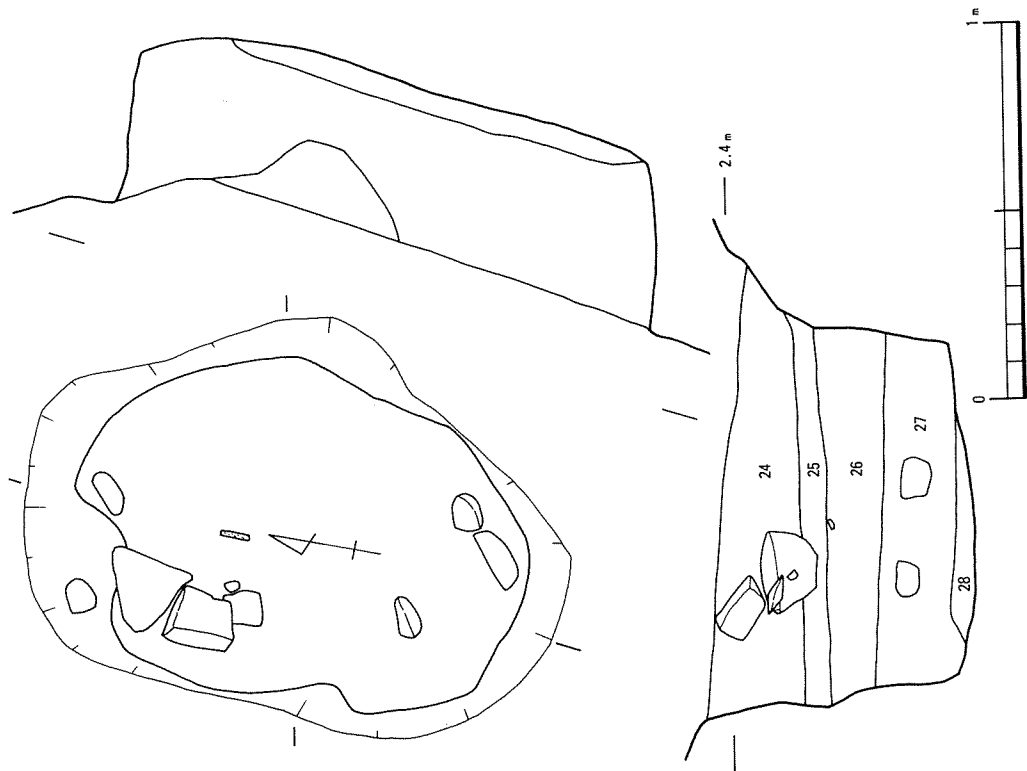
3号貯蔵穴は、南北に長い楕円形で、底の法量47cm×30cm、深さ40cmを測る。上場は、検出



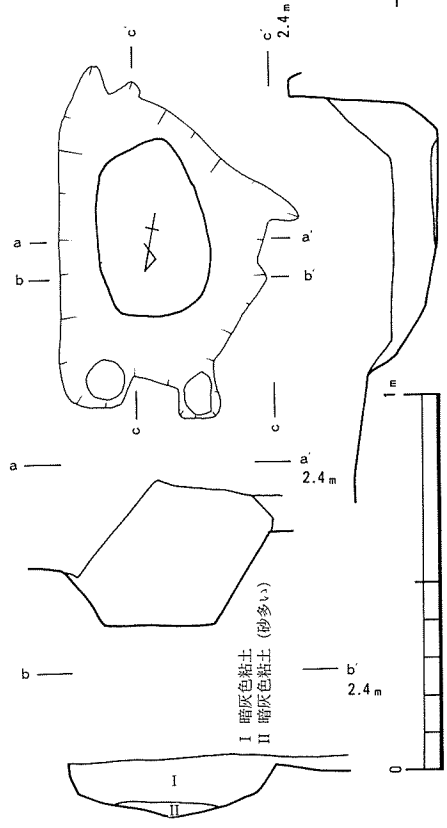
図版9 2号貯蔵穴



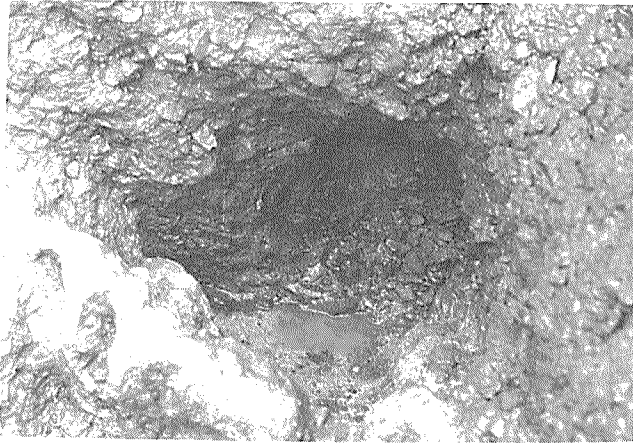
図版10 3号貯蔵穴



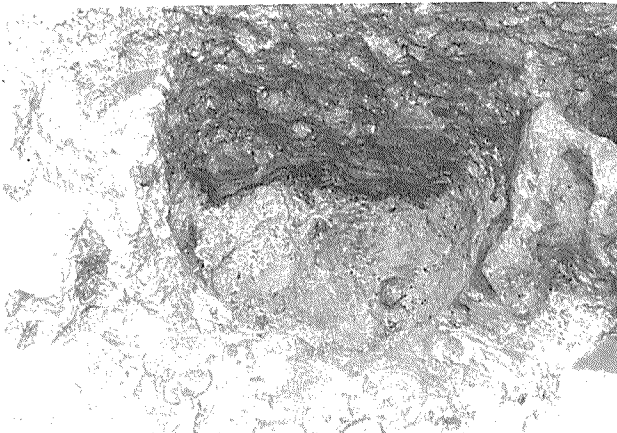
第10图 2号贮藏穴实测图 (1/20)



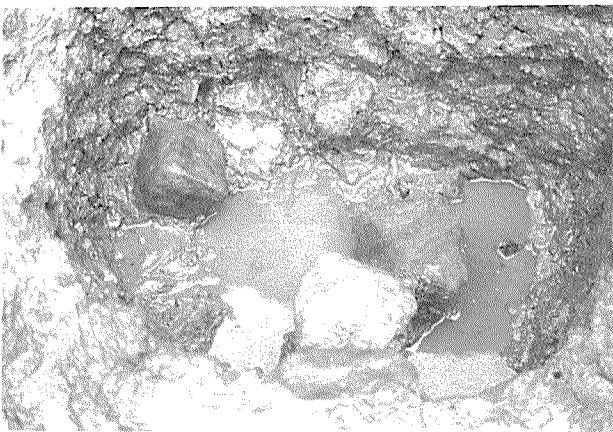
第11图 3号贮藏穴实测图 (1/20)



図版11 4号貯蔵穴



図版12 5号貯蔵穴



図版13 5号貯蔵穴

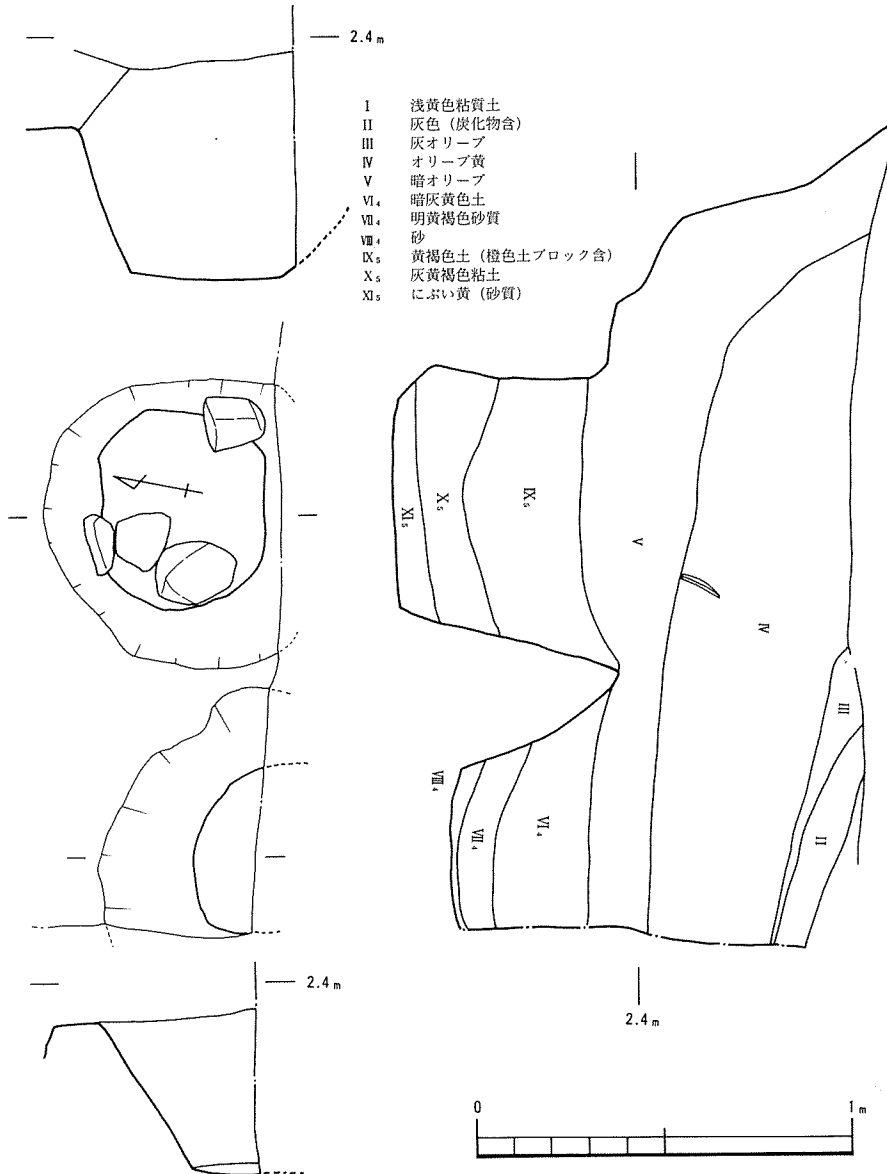
面に凹凸があるため、不整形を呈しているが、長軸75cm、短軸55cmを測る。底は、ほぼ平坦で標高1.97mを測る。壁は、外方へ開きながら立ち上がるが、南側の4号と接する壁は、ほぼ垂直になっていて、その厚さも6cmと非常に薄い。石は、穴内及びその上部にも検出されなかった。また、I層の下位にドングリがわずかに残るほか、壁にも少量附着している。II層は砂層である。

⑤ 4号貯蔵穴

4号貯蔵穴は、全体の約3分の1程の検出にとどまった。その平面形は円形で、底径45cm、上面は推定で90cmを測る。底は平坦で標高1.91m、深さは45cmを測り、壁は大きく外へ開き、断面は逆台形を呈する。穴内及びその上部にも石の存在はなく、VII層にドングリを含んでいて、底の方にわずかに残る程度である。最下層は砂層である。

⑥ 5号貯蔵穴

5号貯蔵穴の平面形は、円形で底径約50cm、上面で75cmを測る。深さは60cm、平坦な底部から上方にわずかに開きながら立ち上がる円筒状を呈する。底の標高は、1.96cmである。石は、底から20cm～50cmの間にあり、大きさは径15cm～22cm程度で4個程確認した。また、ドングリは、IX層からわずかに出土した。最下層はやはり砂層である。



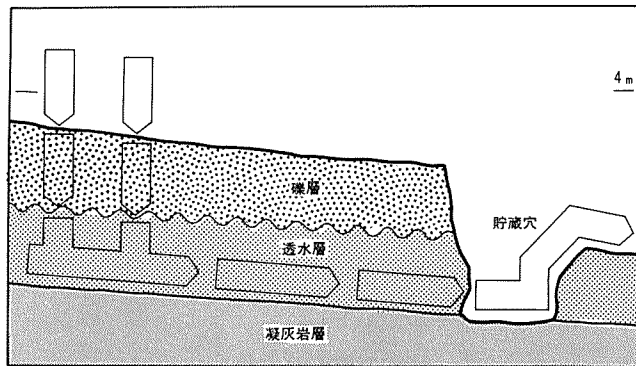
第12図 4号・5号貯蔵穴実測図 (1/20)

小 結

貯蔵穴と湧水について

調査中、各貯蔵穴内は常に地下水が溢れていた。この地下水は、礫層・透水層を透過し、凝灰岩層の上面に沿って台地側から貯蔵穴側に下り、貯蔵穴の壁面から出る。さらに地下水の水位は、貯蔵穴より高い位置にあるので、貯蔵穴の口から地下水が溢れ出るため、貯蔵穴内の水は常に新鮮さを保つことができる。

また、溢れ出た水は、溝状の落ち込み（中層）に沿って他へ流れ出るものと考えられ、落ち込みは、貯蔵穴と同時に存在したものと思われる。 (木下)



第13図 湧水の流れ概念図

第1表 貯蔵穴一覧表

		1号貯蔵穴	2号貯蔵穴	3号貯蔵穴	4号貯蔵穴	5号貯蔵穴
形状	平面形	円形	楕円形	楕円形	円形	円形
	断面形	袋状	筒状	逆台形	逆台形	筒状
計測値	上場	径122cm	145×105cm	75×55cm	径90cm	径75cm
	底	119×110cm	121×90cm	47×30cm	径45cm	径50cm
	くびれ部	106×91cm	—	—	—	—
	くびれ部の位置	底から48cm	—	—	—	—
	深さ	77cm	70cm	40cm	45cm	60cm
	底の標高	1.6m	1.77m	1.97m	1.91m	1.96m
工具痕		残る	—	—	—	—
出土遺物	ドングリ	量	多量	少量	微量	微量
		層	23・24層	26・27層	1層	2層
	出土状態	木葉・枝等と混在	27層の下位に少量	壁に付着	底の方に僅かに残る	底の方に僅かに残る
	その他の遺物	木製品片	石 錘	—	石 錘	—
上部の石	存在	有	有	無	無	有
	位置(底から)	45～80cm	45～70cm	—	—	20～50cm
	大きさ	10～30cm	10～20cm	—	—	15～22cm
	個数	10個程	3個程	—	—	4個
使用状況		使用中	廃棄	廃棄	廃棄	廃棄
備考		ドングリ類はイチイガシ アカガシ シラカシ	石は小さく点々としている			石は穴内

3. 出土遺物

(1) 土器

出土した土器はいずれも縄文式土器であり、それらはおおよそ次の8類21種に分類できるものと思われ、出土位置・層位は第4表に示す通りである。なお各土器の詳細については、繁雑さを避けるため観察表(第2表)に一括した。

地文に貝殻条痕を施すものをI類とするが、その中には1・3・4・5・6・7・8・9のようにミズばれ状の突帯をもつもの(A)や、11・12・24のように凹線文・刺突文をもつもの(B)、13・14のように波状の沈線文をもつもの(C)、2・10・69などのその他(D)の4種類が有るようである。

沈線文を主とするものをII類とする。その内には15・17・18・19・20・21のように平行線文をもつもの(A)と、16・22・23・26・27のように刺突連点文と平行線文をもつもの(B)の2種に分類できる。

凹線文を主とするものをIII類とし、これは25・34・63のように平行線文をもつもの(A)と、28・29・30・31・32・33・39・68の曲線文・刺突文をもつもの(B)の2種がある。

把厚口縁をもつものをIV類とする。これは38・40・41・42・43・44・45のように刺突文・平行線文をもつもの(A)と、36・65などのその他(B)の2種に分けることが出来る。

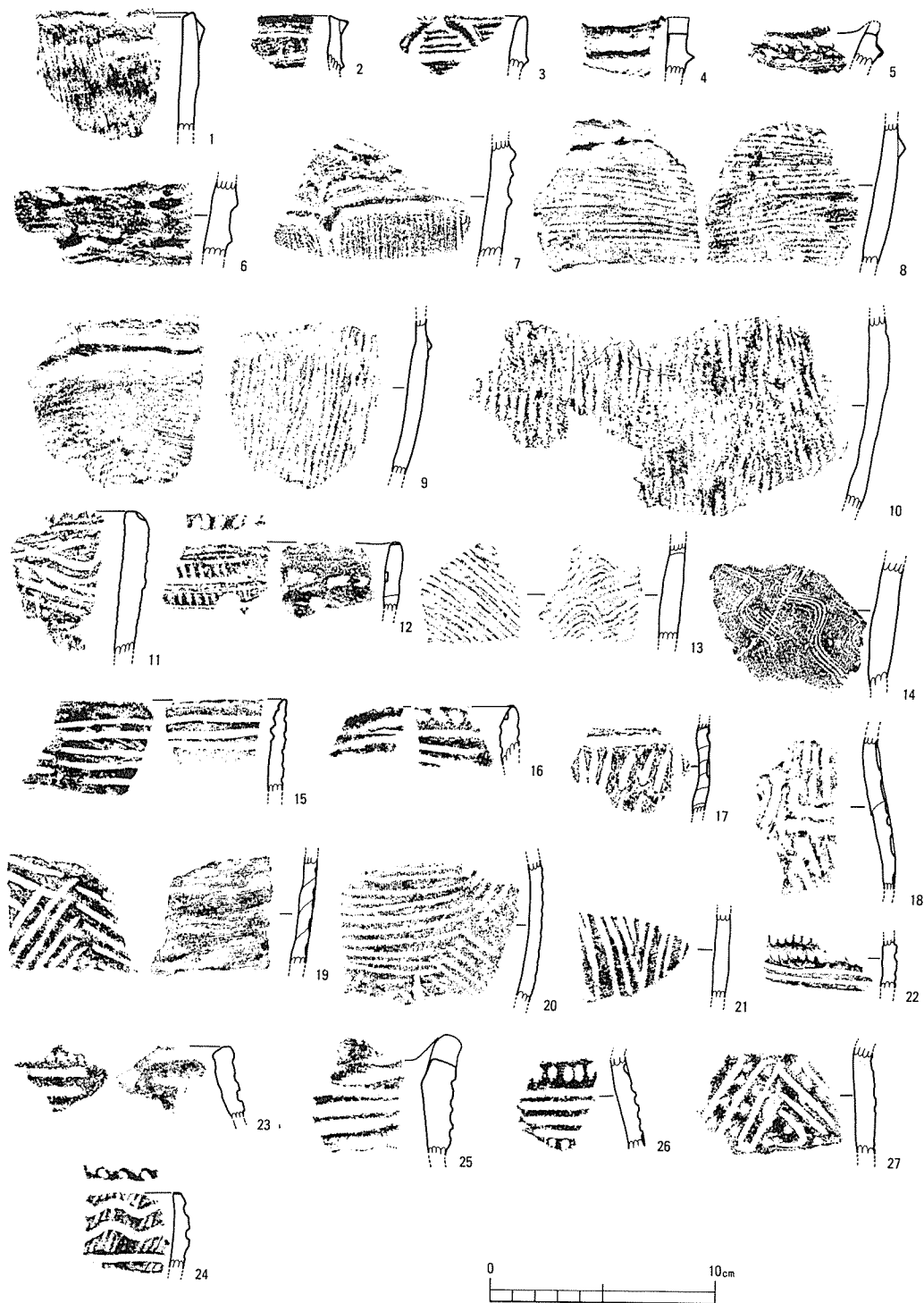
地文に縄文を施すものをV類とするが、その中には46・47・48・49・52・53・54・55・56・57のように縄文のままのもの(A)、59のようにミズばれ状の突帯をもつもの(B)、50・51のように貝圧押点文を施すもの(C)、61・62・64・66の磨消縄文・研磨をほどこすもの(D)の4種類が有る。

VI類として、58のように凹点文を地文とし、ミズばれ状の突帯をもつものがあげられる。

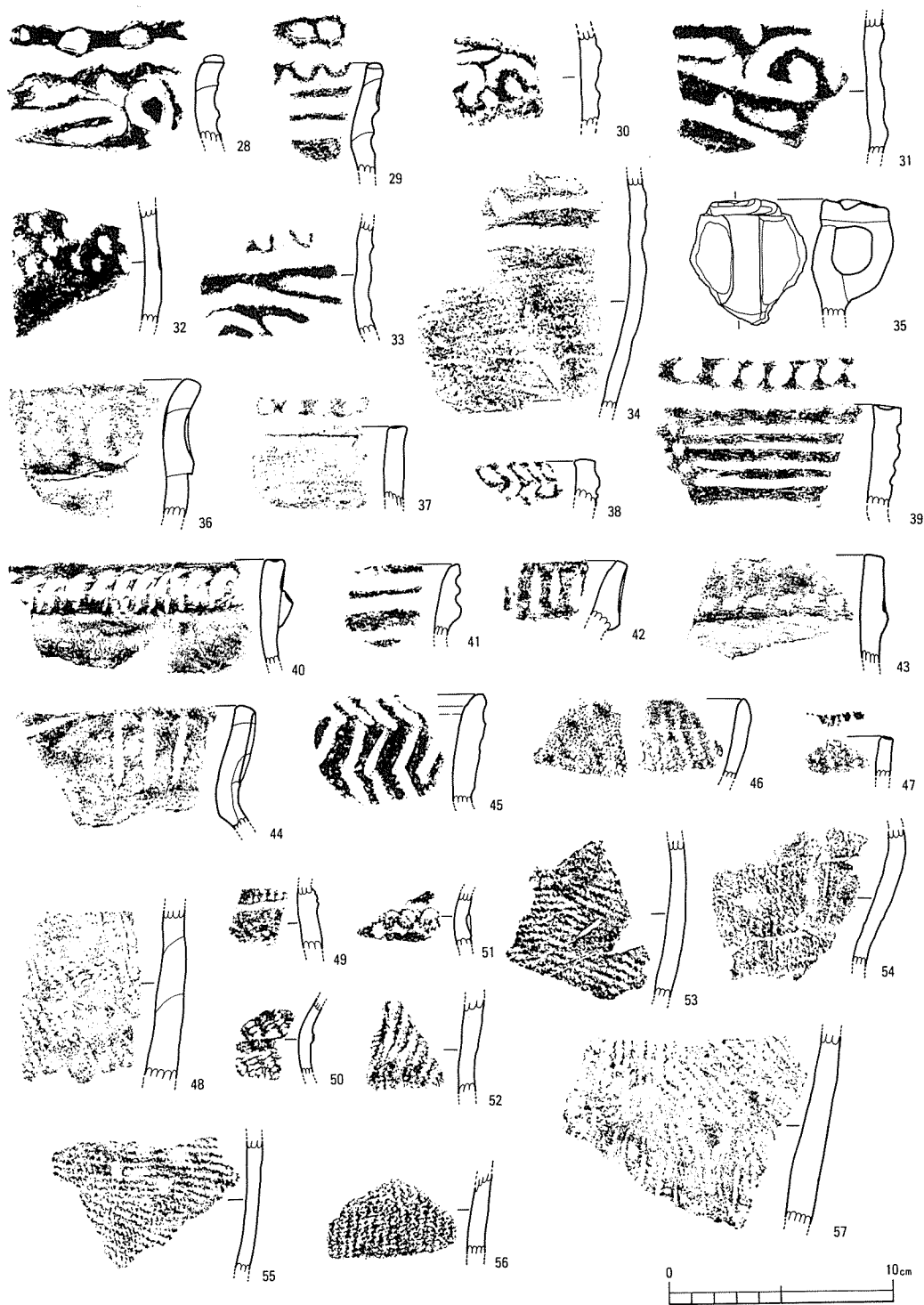
VII類には、37・67の無文を主とするもの(A)、71・73のように突帯文をもつもの(B)、60のように爪形文(C)、35・70・72のように口縁部に把手・注ぎ口を付けるものを一括(D)した4種が有る。

底部をVIII類とすれば、基本的には74・75・76・77・79・80・81の平底をなすもの(A)と、78・82のように支脚・脚台をなすもの(B)の2種がある。

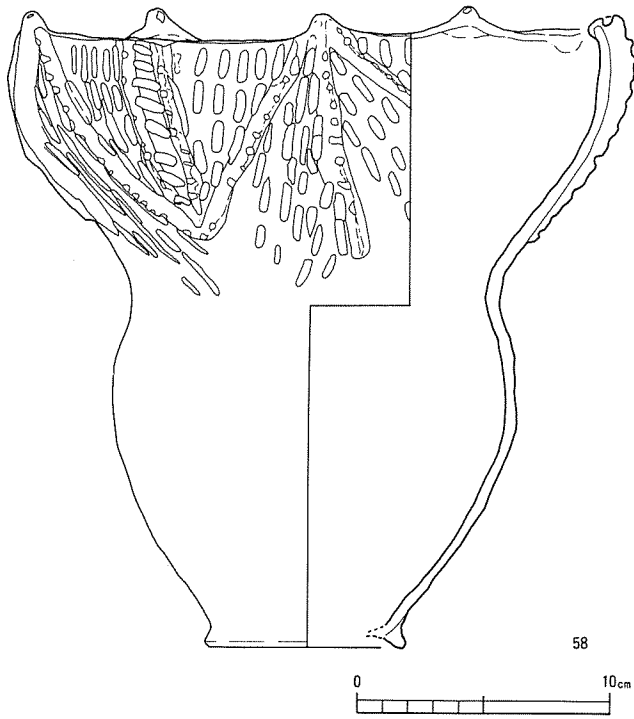
I類に分けたものの大半は轟式土器であり、I類AとDは轟B式土器(1・2・3・4・5・6・7・8・9・10)、I類BとCは轟C式土器(11・13・14)、I類Bのうち12は轟D式土器にそれぞれ該当し、底部の74・75・76も轟式土器と思われる。II類に分けたものの大半(15・16・17・18・19・20・21・22・23・26)は曾畑式土器であり、III類の多く(28・29・30・31・32・33・34)とVIII類の77は、阿高式土器にあたる。また、VI類は阿高式の系統を引く南福寺式土器(36・37)と出水式土器(39・40・42・43・44・45)に分けられ、V類Dの一部は北久根山式土器(66)であろう。V類・VI類の多くとVIII類Bは瀬戸内地方でいう船元式土器(46・47・48・49・50・51・52・53・54・55・56・57・58・59・78)で、VII類C(60)は御手洗A式土器、III類AとV類Dは御手洗B式土器(61・62)であり、63・64もその可能性がある。(高木・清田)



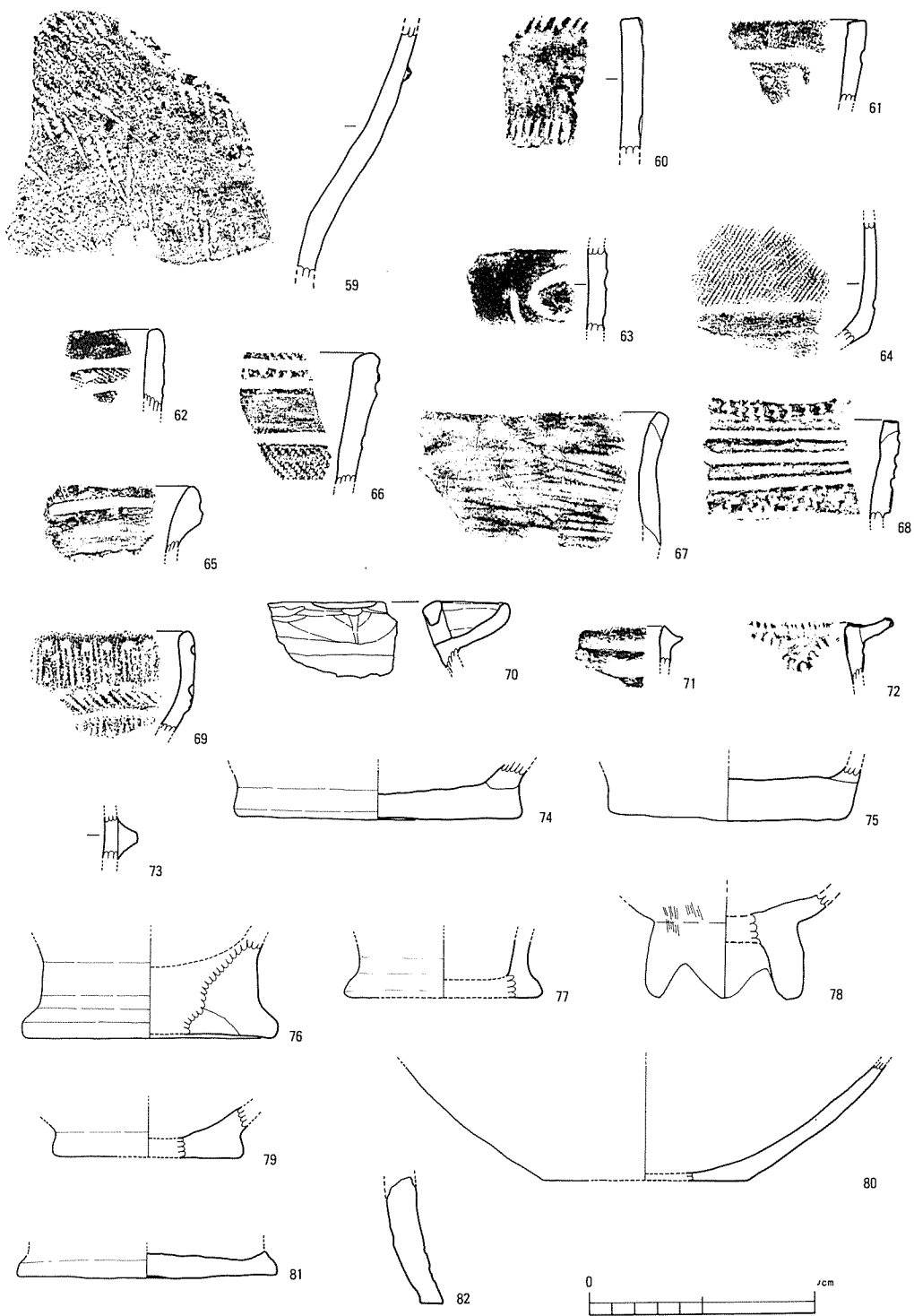
第14图 出土土器实测图(1)



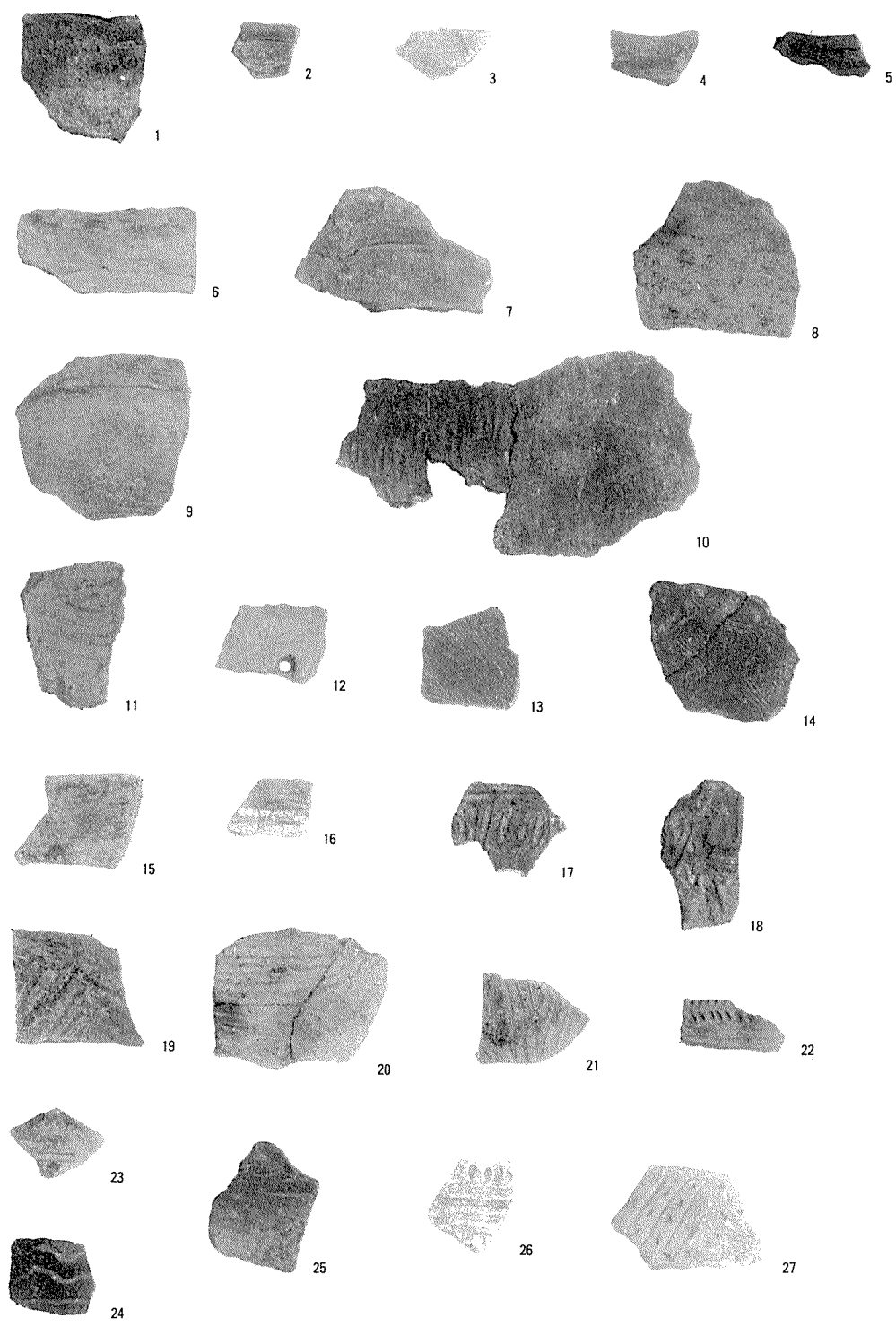
第15图 出土土器实测图(2)



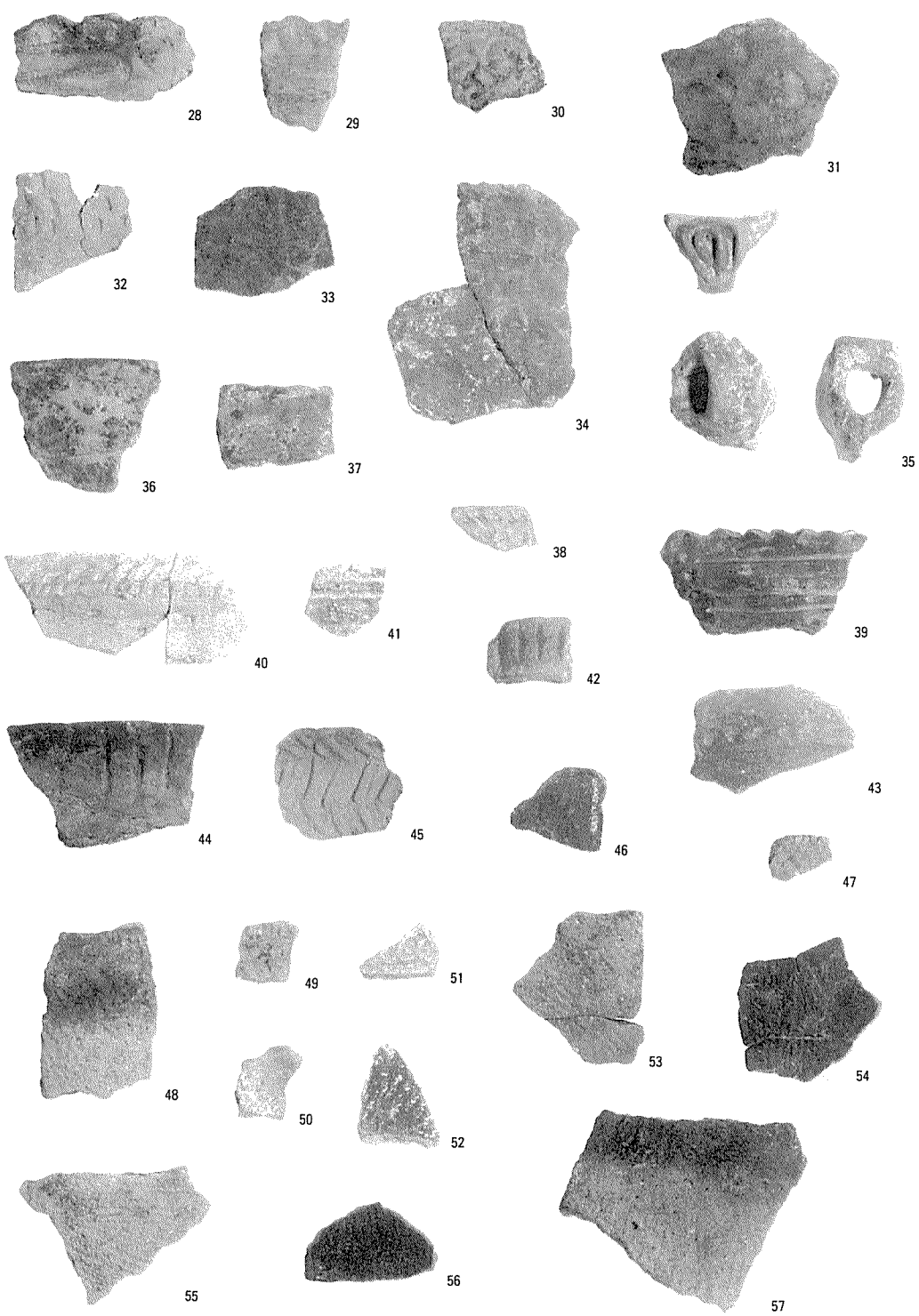
第16図 出土土器実測図(3)



第17图 出土土器实测图(4)



图版14 出土土器 1



图版15 出土土器2



图版16 出土土器3

第2表 出土土器観察表

番号	器形	部位	出土地	形態及び文様等の特徴	調整	色調	胎土	焼成	備考
1	鉢形土器	口縁部	5 T中層 (5図-20層)	突帯文	外面：突帯文 →条痕 内面：条痕 口唇部：ナデ	外面：黄灰褐色 内面：灰褐色	0.5~1.0mmの 角閃石・石英 粒等を多く含 む	良好	轟B式
2	鉢形土器?	口縁部	1号貯蔵穴内 (4図-19層)	突帯文	内外面ともに ナデ	内外面：黒褐色	1.0~1.5mmの 石英・長石粒 等を多く含む	良好	轟B式
3	鉢形土器	口縁部	1号貯蔵穴内 (4図-19層)	隆帯文	内外面：条痕	内外面：明褐色	0.5mm前後の 角閃石粒など を多く含む	良好	轟B式・口 唇部から 内面にか けて小指 大の黒斑 あり
4	鉢形土器	口縁部	5 T中層 (5図-21層)	隆帯文	外面：条痕→ ナデ 内面：ナデ→ 縄文	内外面：明褐色	0.5mm前後の 角閃石粒等 を含む	良好	轟B式
5	鉢形土器	口縁部	5 T中層 (4図-18層)	突帯文	外面：条痕 内面：ナデ	内外面：黒褐色	0.5mm前後の 角閃石・石英 粒を含む	良好	轟B式
6	鉢形土器	胴部	5号貯蔵穴内	隆帯文	外面：上部は ナデ、下部は 条痕 内面：ケズリ	内外面：灰黄褐 色	0.5mm前後の 角閃石粒等 を含む	良好	轟B式
7	鉢形土器	口縁部	9 T	隆帯文	外面：タテ方 向条痕 内面：ヨコ方 向条痕	外面：褐色 内面：黒褐色	0.5mm前後の 角閃石及び石 英粒等を多く 含む	良好	轟B式
8	鉢形土器	胴部	5 T中層 (4図-18層)	内外面：条痕	内外面：褐色	1.0mm前後の石 英粒等を多く 含む	良好	轟B式	
9	深鉢形土器	胴部		隆帯文	外面：ヨコ方 向条痕 内面：タテ方 向条痕	内外面：灰褐色	0.5mm前後の 角閃石粒等 を多く含む	良好	轟B式
10	深鉢形土器	胴部	5 T中層 (5図-20層)		外面：5条を1 単位とするタテ 方向の条痕 内面：ナデ	内外面：灰褐色	0.5mm~1.0mm の角閃石粒を 多く含む	良好	轟B式、 外面に 僅かに 煤付着
11	鉢形土器	口縁部	9 T	口唇部刻み目	内外面：条痕 口唇部：ナデ	内外面：明褐色	0.5~1.0mmの 砂粒を多く含 む	良好	轟C式
12	鉢形土器	口縁部	9 T	口唇部 刺突文 内面 刺突文	外面：条痕 内面：ナデ	内外面：明褐色	0.5mm前後の 角閃石粒等 を多く含む		轟D式 補修孔 あり
13	鉢形土器	胴部	5 T中層 (5図-21層)		外面：ナナメ 方向条痕 内面：波状条 痕	内外面：黒褐色	0.5mm前後の 石英角閃石粒 等を多く含む	良好	轟C式
14	鉢形土器	胴部	2号貯蔵穴内 (5図-25層)			内外面：黒褐色	0.5~1.0mm前 後の角閃石・ 石英粒等を含 む	やや 不良	轟C式
15	鉢形土器	口縁部	5 T中層 (4図-18層)	沈線文		内外面：黄褐色	0.5mm前後の 角閃石粒等 を含む	良好	曾畑式
16	鉢形土器	口縁部	5 T中層 (4図-18層)	沈線文 口縁部内面に刺 突文	内外面：ナデ	内外面：明褐色	0.5mm前後の 角閃石粒を含 む	良好	曾畑式

番号	器形	部位	出土地	形態及び文様等の特徴	調整	色調	胎土	焼成	備考
17	鉢形土器?	胴部	5 T中層 (4図-18層)	沈線文	内外面:ナデ	内外面:灰黒色	1.0mm前後の石英粒等を多く含む	良好	曾畑式
18	鉢形土器	胴部	5 T中層 (4図-17層)	沈線文	内面:ナデ	外面:黒褐色 内面:暗褐色	1.0mm前後の石英粒等を多く含む	良好	曾畑式
19	鉢形土器	胴部	5 T中層 (4図-17層)	沈線文	外面:ナデ→ 沈線 内面:ナデ	外面:灰褐色 内面:黄褐色	0.3mm前後の角閃石粒等を多く含む	良好	曾畑式
20	鉢形土器	胴部	5 T中層 (5図-22層)	沈線文	外面:ナデ→ 沈線 内面:ナデ	外面:灰黄褐色 内面:灰褐色	1.0~1.5mmの角閃石・石英粒等を含む	良好	曾畑式、 外面に僅かに煤付着
21	鉢形土器	胴部	5 T中層 (5図-22層)	沈線文	外面:沈線→ ナデ 内面:ナデ	内外面:黄褐色	0.5~1.0mmの角閃石粒を含む	良好	曾畑式、 外面に若干の煤付着
22	鉢形土器	胴部	5 T中層 (4図-18層)	沈線文・刺突文		外面:黄褐色 内面:灰褐色	0.5mm前後の角閃石石英粒等を多く含む	良好	曾畑式
23	鉢形土器?	口縁部	9 T	沈線文・刺突文	外面:沈線→ ナデ→刺突 内面:沈線→ ナデ	外面:明褐色 内面:灰白色	0.5mm前後の角閃石・石英粒を含む	良好	曾畑式
24	鉢形土器	口縁部	5 T中層 (4図-17層)	沈線文 口唇部刺突文	外面:タテ方向 条痕→沈線 内面:条痕	内外面:灰黒色	0.5mm前後の角閃石等を多く含む	良好	
25	鉢形土器	口縁部	5 T上層	凹線文	外面:ナデ→ 凹線 内面:ナデ	内外面:暗褐色	0.5mm前後の石英粒を多く含む	良好	
26	鉢形土器	胴部	9 T	沈線文・刺突文	外面:ナデ→ 沈線・刺突	外面:灰白色 内面:灰色	0.5mm前後の角閃石・石英粒等を含む	良好	曾畑式
27	鉢形土器	胴部	9 T	沈線文・刺突文	外面:ナデ→ 沈線→刺突 内面:ナデ	内外面:灰褐色	0.5mm前後の砂粒を少量含む	良好	
28	鉢形土器	口縁部	5 T上層	凹線文・口唇部に凹点文	外面:ナデ→ 凹線 内面:ナデ	内外面:灰褐色	0.5~1.0mmの角閃石粒等を多く含む	良好	阿高式
29	鉢形土器	口縁部		凹線文・口唇部に凹点文	外面:ナデ→ 凹線→凹点 内面:ナデ	内外面:暗褐色	0.5~1.0mmの角閃石粒等を多く含む	良好	阿高式
30	鉢形土器	胴部	5 T上層	凹線文	外面:ナデ→ 凹線 内面:指押→ ナデ	内外面:褐色	0.5mm前後の砂粒を含む	良好	阿高式
31	鉢形土器	胴部	5 T上層	凹線文	外面:ナデ→ 凹線→凹点 内面:指押→ ナデ	外面:暗褐色 内面:褐色	1.0~1.5mmの角閃石・石英及び白色砂粒を多く含む	良好	阿高式
32	鉢形土器	胴部	5 T上層	凹点文	外面:ナデ→ 凹点 内面:ナデ	外面:灰黒色 内面:黒色	0.5~1.0mmの滑石粒を多く含む	良好	阿高式
33	鉢形土器	胴部	5 T上層	凹線文	外面:ナデ→ 凹線→凹点 内面:ナデ	外面:暗褐色 内面:褐色	1.0mmの石英・角閃石粒等を多く含む	良好	阿高式、 外面にカーボン付着

番号	器形	部位	出土地	形態及び 文様等の特徴	調整	色調	胎土	焼成	備考
34	深鉢形土器	胴部	5 T上層	凹線文	外面：上部ナデ→凹線、下部ケズリ→ナデ 内面：ナデ	内外面：暗褐色	1.0～1.5mmの角閃石粒等を多く含む	良好	阿高式
35	鉢形土器	口縁部 把手	5 T上層	口縁部把手	内外面：ナデ	外面：暗褐色 内面：褐色	0.5mm 前後の石英粒等を含む	良好	南福寺式？
36	鉢形土器	口縁部	5 T上層	口縁部肥厚	内外面：ナデ→凹点	外面：赤褐色 内面：茶褐色	0.5～1.0mmの石英粒等を含む	良好	南福寺式
37	鉢形土器	口縁部	5 T上層	口唇部に凹点文	内外面：工具によるナデ	内外面：暗褐色	0.5～1.0mmの滑石粒を多く含む	良好	南福寺式
38	鉢形土器	口縁部	9 T	列点文	内面：ナデ	内外面：明褐色	1.0mm 前後の石英粒等を多く含む	良好	南福寺式？
39	鉢形土器	口縁部	5 T上層	沈線文・刺突文、 口唇部に凹点	外面：ナデ→沈線 内面：ナデ	外面：黒褐色 内面：明褐色	0.5mm 前後の角閃石粒を多く含む	良好	出水式
40	鉢形土器	口縁部	9 T	口縁下に突帯、 列点文	外面：ナデ→刺突 内面：ナデ	外面：明褐色 内面：灰褐色	0.5mm 前後の石英粒等を多く含む	良好	出水式
41	鉢形土器	口縁部	5 T上層	沈線文		内外面：暗赤褐色	1.0～1.5mmの滑石粒を多く含む	良好	出水式？
42	鉢形土器	口縁部	9 T	口縁部肥厚、縦 沈線文	外面：ナデ→仄形文 内面：ナデ	内外面：灰褐色	1.0～1.5mmの石英・長石・角閃石粒を多く含む	良好	出水式
43	鉢形土器	口縁部	9 T	列点文	内外面：ナデ	内外面：暗褐色	0.5～1.0mmの滑石粒を多く含む	良好	出水式
44	鉢形土器	口縁部	5 T上層	縦沈線文	内外面：ナデ	内外面：暗褐色	0.5～1.0mmの石英粒角閃石粒等を多く含む	良好	出水式
45	鉢形土器	口縁部	9 T	沈線文	外面：ナデ→沈線 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：明褐色	0.5～1.0mmの長石・石英粒を多く含む	良好	出水式
46	浅鉢形土器	口縁部	5 T中層 (5 図-21層)		外面：縄文→ナデ 内面：縄文	外面：灰黒色 内面：褐色	0.5mm 前後の石英粒等を多く含む	良好	船元式
47	鉢形土器？	口縁部	5 T中層 (4 図-17層)	口唇部に刺突文	外面：ナデ→縄文 内面：ナデ	外面：黄褐色 内面：灰黄褐色	0.5mm 前後の砂粒を含む	良好	船元式
48	鉢形土器	胴部	5 T中層 (4 図-18層)		外面：縄文 内面：ナデ	内外面：明褐色	0.5mmの角閃石粒等を多く含む	良好	船元式
49	鉢形土器	口縁部	5 T上層	突帯文	外面：ナデ→刺突 内面：ナデ	内外面：灰白色	0.5mm 前後の角閃石粒を含む	良好	船元式
50	鉢形土器	胴部	2号貯蔵穴内 (5 図-24層)	突帯文	外面：縄文 内面：ナデ	外面：灰褐色 内面：灰黒色	0.5mm 前後の石英粒等を含む	良好	船元式

番号	器形	部位	出土地	形態及び 文様等の特徴	調整	色調	胎土	焼成	備考
51	鉢形土器	胴部	5 T中層 (5図-21層)	貝殻頂による押 圧	外面：ナデ→ 縄文 内面：ナデ	外面：暗褐色 内面：明褐色	0.5mm前後の 角閃石粒等を 多く含む	良好	船元式
52	鉢形土器	胴部	5 T上層		外面：縄文 内面：ナデ	外面：灰黒色 内面：明褐色	0.5mm前後の 角閃石粒等を 含む	良好	船元式
53	鉢形土器	胴部	5 T中層 (4図-17層)		外面：縄文 内面：ナデ	内外面：暗褐色	0.5~1.0mmの 角閃石及び石 英粒等を多く 含む	良好	船元式
54	鉢形土器	胴部	5 T中層 (4図-18層)		外面：縄文 内面：ナデ	外面：灰黒色 内面：灰色	0.5~1.0mmの 角閃石・石英 粒等を含む。 密	良好	船元式、 外面に僅 かに丹塗 りの痕跡 あり
55	鉢形土器	胴部	5 T中層 (4図-17層)		外面：縄文 内面：ナデ	外面：明褐色 内面：暗褐色	0.5~1.0mmの 角閃石粒及び 少量の雲母粒 等を含む		船元式
56	鉢形土器	胴部	5 T中層 (4図-17層)		外面：縄文 内面：ナデ	外面：灰黒色 内面：褐色	0.5mm~1.0mm の石英粒・角 閃石粒等を多 く含む	良好	船元式
57	深鉢形土器	胴部	5 T中層 (4図-17層)		外面：縄文→ 一部ナデ 内面：ナデ	内外面：明褐色、 外面上部は黒 褐色	1.0mm前後の 角閃石粒等を 多く含む	良好	船元式
58	キャリバー型土器 口径23cm、底 径8cm、器高 25.8cm、くび れ部径14.6cm	完形	5 T中層 (5図-21層)	外面上部の隆帯 に刻目を入れ、 その間に短い沈 線を施す。口 唇部は、5ヶ所 に隆起をつくり、 5分割する。底 部は上底。	外面：胴部に 斜方向の条痕 あり。 内面：一部に 条痕あり。	内外面：灰黄褐 色	精緻	良好	船元式
59	深鉢形土器	胴部	5 T中層 (4図-17層) (12図-IV層)		外面：縄文	外面：黒褐色 内面：暗褐色	0.5mm前後の 角閃石粒等を 含む	良好	船元式
60	鉢形土器	口縁部	9 T	爪形刺突文	外面：ナデ→ キザミ目 内面：ナデ	内外面：灰白色	0.5mm前後の 角閃石粒等を 多く含む	良好	御手洗 A式
61	鉢形土器	口縁部	9 T	凹線文・磨消縄 文	内外面：縄文 →研磨	内外面：明褐色	0.5mm前後の 砂粒を少量含 む	良好	御手洗 B式
62	鉢形土器	口縁部	9 T	磨消縄文	外面：上部→ヨコ 方向研磨、下部は縄 文 内面：ヨコ方向研磨	内外面：黒褐色	0.5mm前後の 角閃石・石英 粒等を多く含 む	良好	御手洗 B式
63	鉢形土器	胴部	5 T上層	凹線文	内外面：ナナ メ方向の研磨	外面：暗黄褐色 内面：黒褐色	0.5~1.0mmの 石英粒等を含 む	良好	御手洗 B式？
64	鉢形土器	胴部	9 T	磨消縄文	外面：上半は縄 文、下半はナデ 内面：条痕→ナ デ	外面：黄灰色 内面：黄褐色	0.5mm前後の 角閃石粒を含 む	良好	御手洗 B式平 行
65	鉢形土器	口縁部	9 T			内外面：灰褐色	0.5mm前後の 角閃石粒等を 多く含む	良好	北久根 山式？
66	鉢形土器	口縁部	9 T	磨消縄文	外面：縄文、 沈線間ナデ 内面：ナデ	内外面：暗褐色	0.5mm前後の 角閃石粒を多 く含む	良好	北久根 山式

番号	器形	部位	出土地	形態及び文様等の特徴	調整	色調	胎土	焼成	備考
67	鉢形土器	口縁部	9 T		外面：ヨコ方向の 荒い研磨→ナデ 内面：指押→ナデ	内外面：明褐色	0.3~0.5mmの 雲母粒を多く 含む	良好	天城式、 外面に 親指大の 黒斑
68	鉢形土器	口縁部	9 T	沈線文、胴部と 口唇部に貝腹線 による刺突文	外面：ナデ→沈 線→貝殻縷文 内面：ヨコ方向 荒研磨	内外面：灰褐色	0.5~1.0mmの 角閃石・石英 粒等を多く含 む	良好	
69	鉢形土器	口縁部	5 T中層 (4図-18層)	刺突文	外面：条痕→ 刺突 内面：ナデ	内外面：灰黒色	0.5mm前後の 石英粒を多く 含む	良好	
70	鉢形土器	口縁部 (注口)	5 T上層		内外面：ナデ	内外面：暗褐色	1.0mm前後の 滑石粒を多く 含む	良好	
71	鉢形土器	口縁部	5 T中層 (4図-17層)			内外面：暗赤褐 色	0.5mm前後の 滑石粒を多く 含む	良好	
72	鉢形土器	口縁部	5 T中層 (4図-18層)	把手？、爪形刺 突文	内面：ナデ	内外面：黄褐色	0.5mm前後の 角閃石を含む	良好	
73		胴部	5 T中層 (4図-18層)	突帯上に刺突文	外面：突帯→ ナデ→キザミ 内面：縄文	外面：灰褐色 内面：黄褐色	0.5mm前後の 角閃石粒等を 多く含む	良好	
74	鉢形土器	底部	9 T		内外面：ナデ	外面：灰褐色 内面：褐色	0.5~1.0mmの 角閃石粒を多 く含む	良好	轟式(B 又はC 式)
75	鉢形土器	底部	5 T上層		内外面：ナデ	内外面：灰褐色	0.5~1.0mmの 角閃石粒を多 く含む	良好	轟式(B 又はC 式)、二 次的に 焼成を 受ける。
76	鉢形土器	底部	9 T		外面：ナデ	外面：灰褐色	1.0mm前後の 角閃石、石英 粒等を多く含 む	良好	轟C式 ？
77	鉢形土器？	底部	9 T		内外面：ナデ	外面：褐色 内面：灰褐色	0.5~1.0mmの 角閃石粒等を 多く含む	良好	阿高式 底部
78	鉢形土器	底部	5 T上層	支脚状	外面：ナデ (一部条痕) 内面：ナデ	内外面：灰褐色	0.5mm前後の 角閃石粒等を 含む	良好	船元式
79	鉢形土器	底部	9 T			外面：明褐色 内面：灰褐色	0.5mm前後の 角閃石粒等を 多く含む	良好	(晩期)
80	浅鉢形土器？	底部	9 T		内外面：丹念 なへら磨き	内外面：灰褐色	0.5mm前後の 角閃石粒等を 含む	良好	外面の 一部に 煤付着
81	鉢形土器	底部	9 T			内外面：暗褐色	1.5~2.0mmの 滑石粒を多く 含む	良好	外面に 煤付着
82	鉢形土器？	底部	9 T	高台	外面：ナデ→ 沈線 内面：ナデ	内外面：黄褐色	1.5~2.0mmの 石英粒等を多 く含む	良好	

第3表 層別出土遺物対照表

トレンチ名		5 T						9 T
型式	層位	中 層			下層(貯蔵穴内)			カクラン層
	上 層 (カクラン)	5 図-20層	4 図-17層 5 図-21層	4 図-18層 5 図-22層	1号	2号	5号	
轟 B 式土器		1、10	4	5、8	2、3		6	7
曾畑式土器			18、19	15、16、17、 20、21、22				23、26
轟 C 式土器			13			14		11
轟 B or C 式	75							74
轟 D 式土器								12
船元式土器	49、52、78		46、47、51、 53、55、56、 57、58、59	48、54		50		
阿高式土器	28、30、31、 32、33、34							77
南福寺式土器	35?、36、 37							38?
出水式器	39、41?、 44							40、42、43、 45
御手洗 A 式								60
御手洗 B 式	63?							61、62、64?
北久根山式								65?、66
玉城式土器								67
石 器		3、7、20、 23、30	4、5、6、 8、11、15、 18、21、24、 32、33	2、10、12、 13、14、22、 28、34	1、9、 16	17、26		19、31、35、 37
木 製 品					41			

(数字は遺物番号)

(2) 石器

① 石 鏃 (1～12)

1は断面の一方が平坦で、基部の一方を欠損する。挟入部は鋭い。2は脚部が対称である。3は長脚部をもち一部を欠損する。4は全体的に細身で、挟入部が深い。5は他と比べ長い脚部をもち。6は全体的に大まかな剥離によって加工され、脚部の一部を欠損する。7は背面に自然面を残し、こまかな剥離により三角形状に調整している。8は先端部と基部を欠損しているため全体は不明だが、残部より三角形を呈すると思われる。9は先端部を欠損し、挟入部はやや浅い。10は三角形を呈し、基部の一部を欠損する。11は大まかな剥離により三角形状になっており、先端部を欠損する。12はやや荒い剥離により加工され、先端部を欠損する。

② 尖頭器 (13)

縦長剥片を素材として用い、両側縁部に加工を施している。

③ 石 匙 (14・19)

14は上部をわずかにつまみ状に加工し、下部および右側縁部を調整剥離している。19は下部を欠損しているが、横型で三角形状になると思われる。背面に自然面を残す。

④ 削 器 (15・18)

15は横長剥片を素材として、正面側縁部を刃部として使用。一部自然面を残す。18は正面左側縁部をおおまかな剥離により調整された縁辺を刃部として使用したと思われる。右側縁部はこまかな調整により刃部を形成している。両側縁部とも使用によると思われる細かな刃こぼれが認められる。

⑤ 石 錐? (17)

先端部の一部に自然面を残す

⑥ 二次加工剥片・使用痕剥片 (16・20～24)

16は縦長剥片を素材として使用し、表面右側縁部および下部を刃部として使用したと思われる。20は縦長剥片を素材とし、一部自然面を残している。両側縁部に使用痕が認められる。21は不定形剥片を素材とし、下部に使用痕が認められる。22は縦長剥片を素材とし、全体に風化が進んでいる。一部自然面を残し、正面左側縁部に使用痕が残る。23は残核を利用した二次加工剥片と思われ、下部に刃部を形成している。

⑦ 石 錘 (25・26)

25は長軸両端を打ち欠きで作っている。対角に剥離と打痕が認められるが明確でない。26は有溝石錘である。

⑧ 磨 石 (27・28)

27は側縁部に若干の敲打痕を残し、研磨痕が著しい。28は半分を欠損する。側縁部にうす

い稜と敲打痕が残る。

⑨ 礫器 (29・30)

29は板状の礫を素材として、縁辺に加工を施している。30は石核を素材とした石核石器と思われる。

⑩ 磨製石斧 (31～34)

31は基部を残し他は欠損している。全面による磨かれ、側縁部にうすい稜が残る。34は先端部を欠損する。調整のための敲打痕が残る。32は基部を欠損、刃部に使用痕が著しい。33は基部近くのもので、他は欠損する。

⑪ 砥石 (35)

35は上半部を欠損し、正面に擦痕が数余に走る。横断面はほぼ正方形に近い。

⑫ 用途不明石器 (36・37)

36は粘板岩状の石材を用い、表面・側面に擦痕が多く残る。石包丁の破片とも考えられるが、明確でない。37は両端部がわずかにふくらむ柱状になっている。中段からふくらみにかけて横に小さなきざみが線状になっている。横断面は正円に近い。正面上部のふくらみに2～3mmの孔を通してある。石錘か。

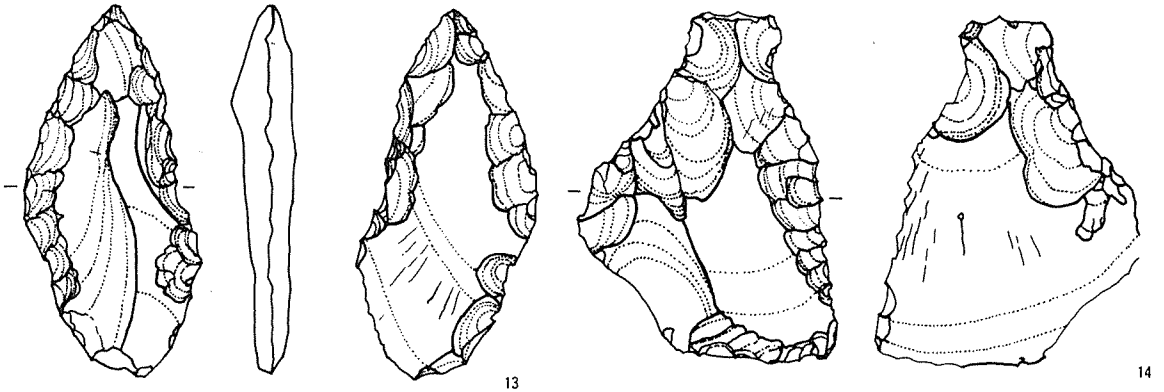
⑬ 土錘 (38～40)

38は径0.8～1.1cm、中央に0.3～0.4cmの孔を通す。39は径0.7～0.8cm、中央に0.3～0.4cmの孔を通す。40は下部を欠損する。残部より径0.5～1.0cm、中央に0.2～0.3cmの孔を通す。

(豊崎)

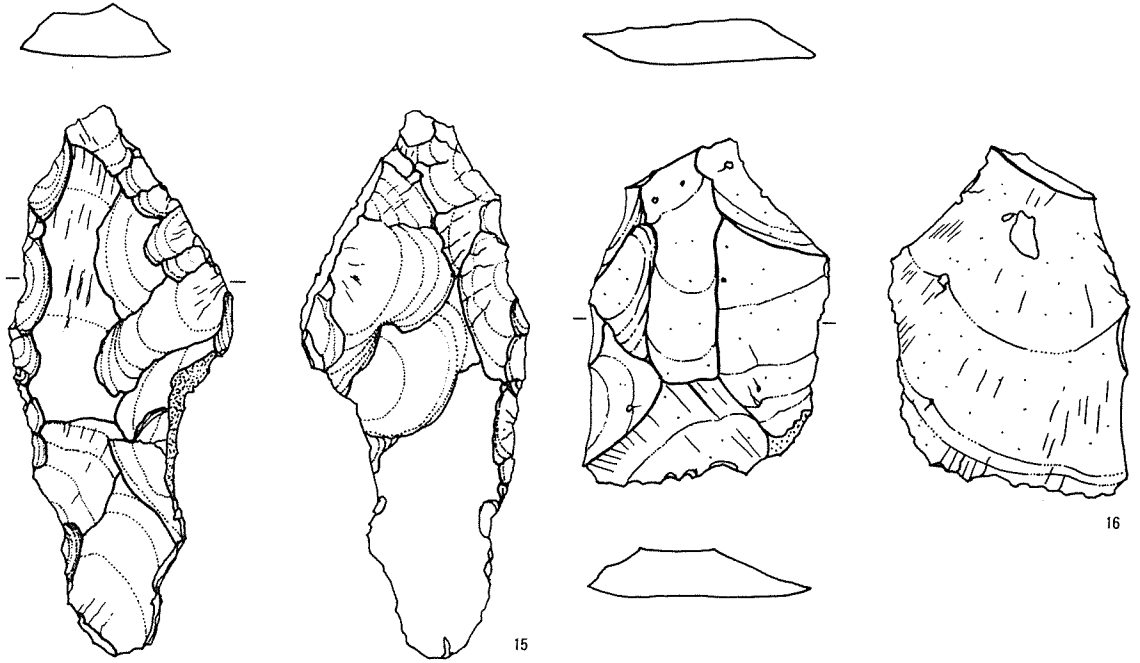


第18图 出土石器实测图(1)



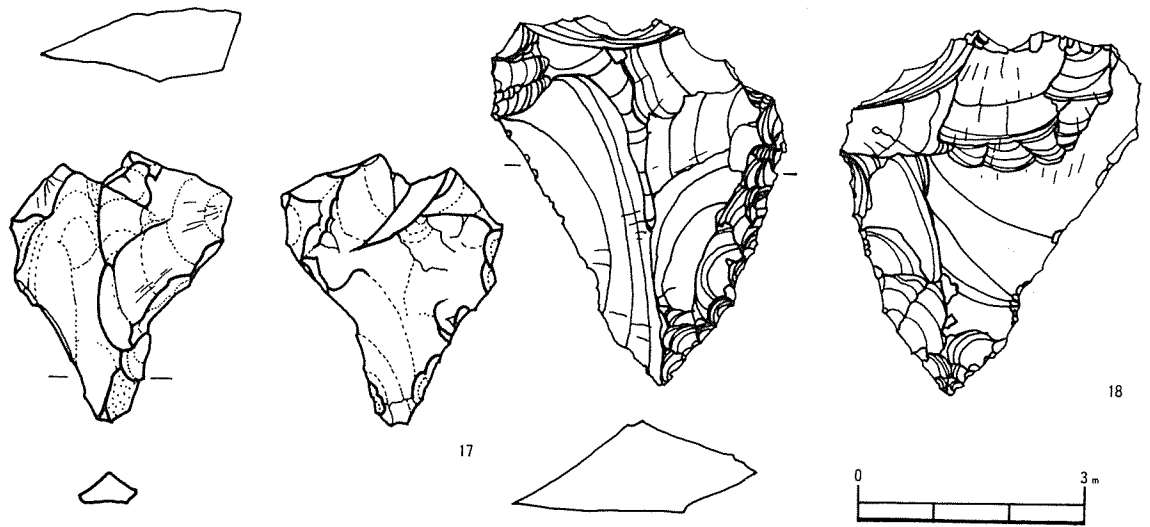
13

14



15

16

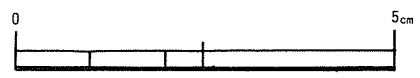
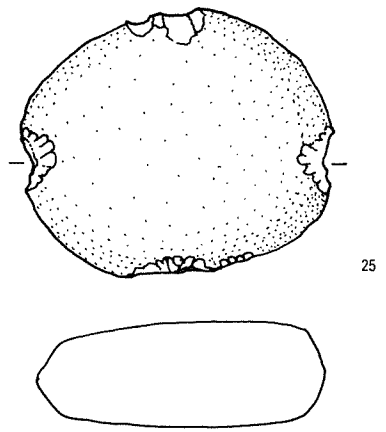
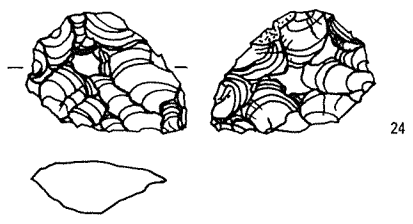
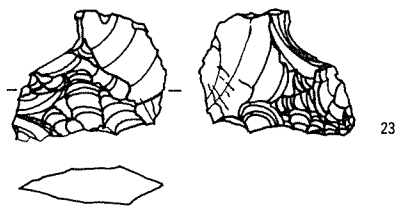
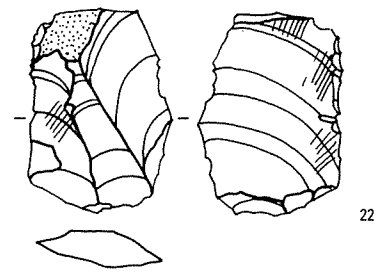
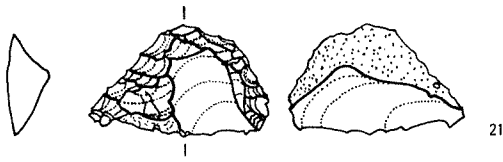
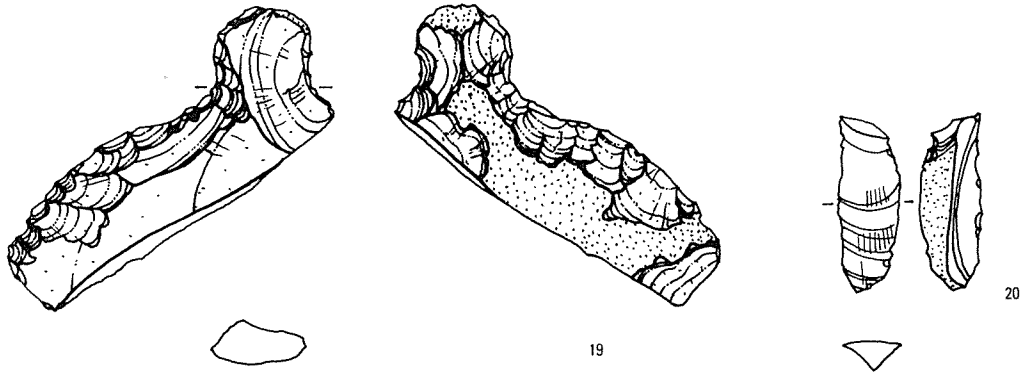


17

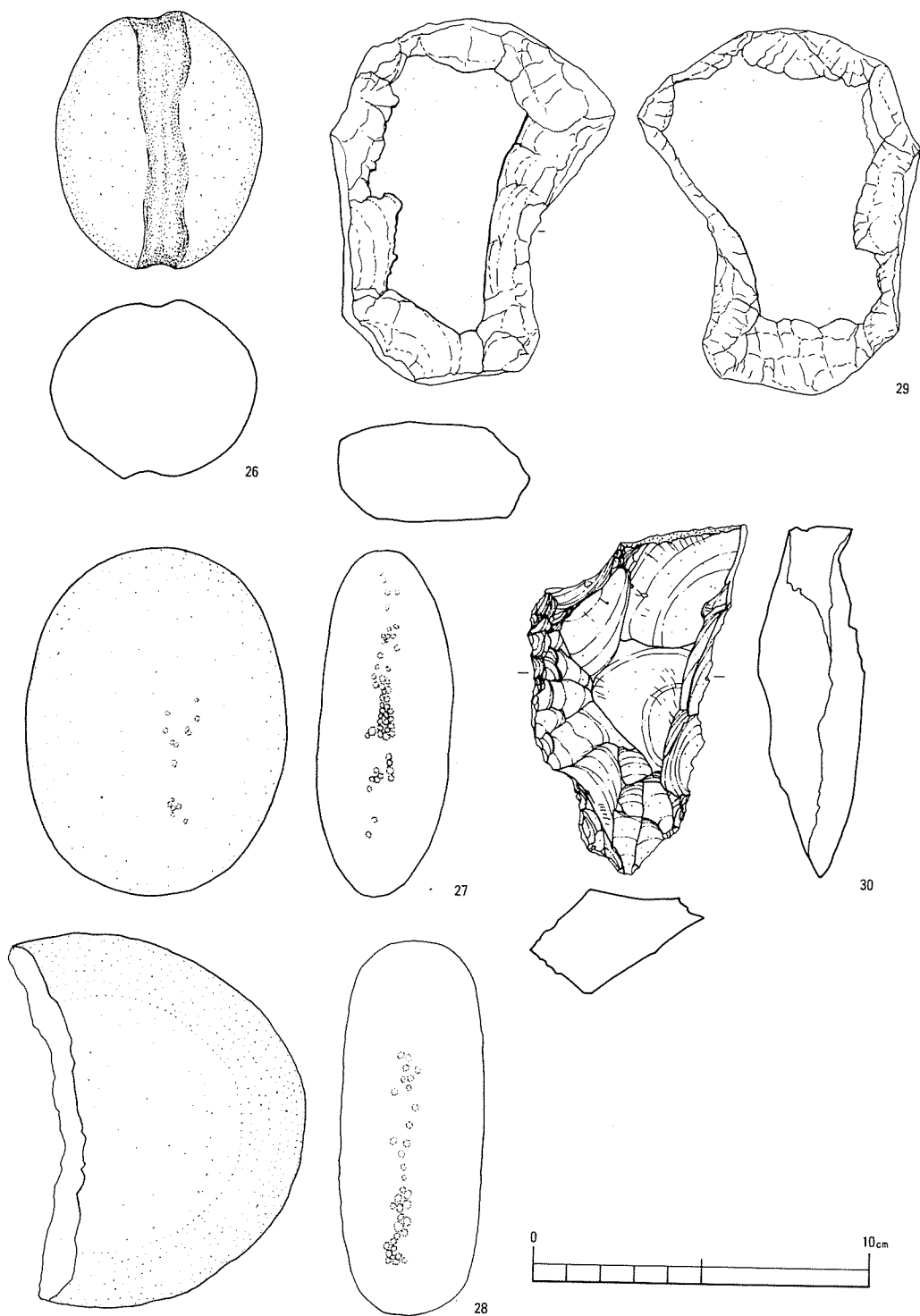
18



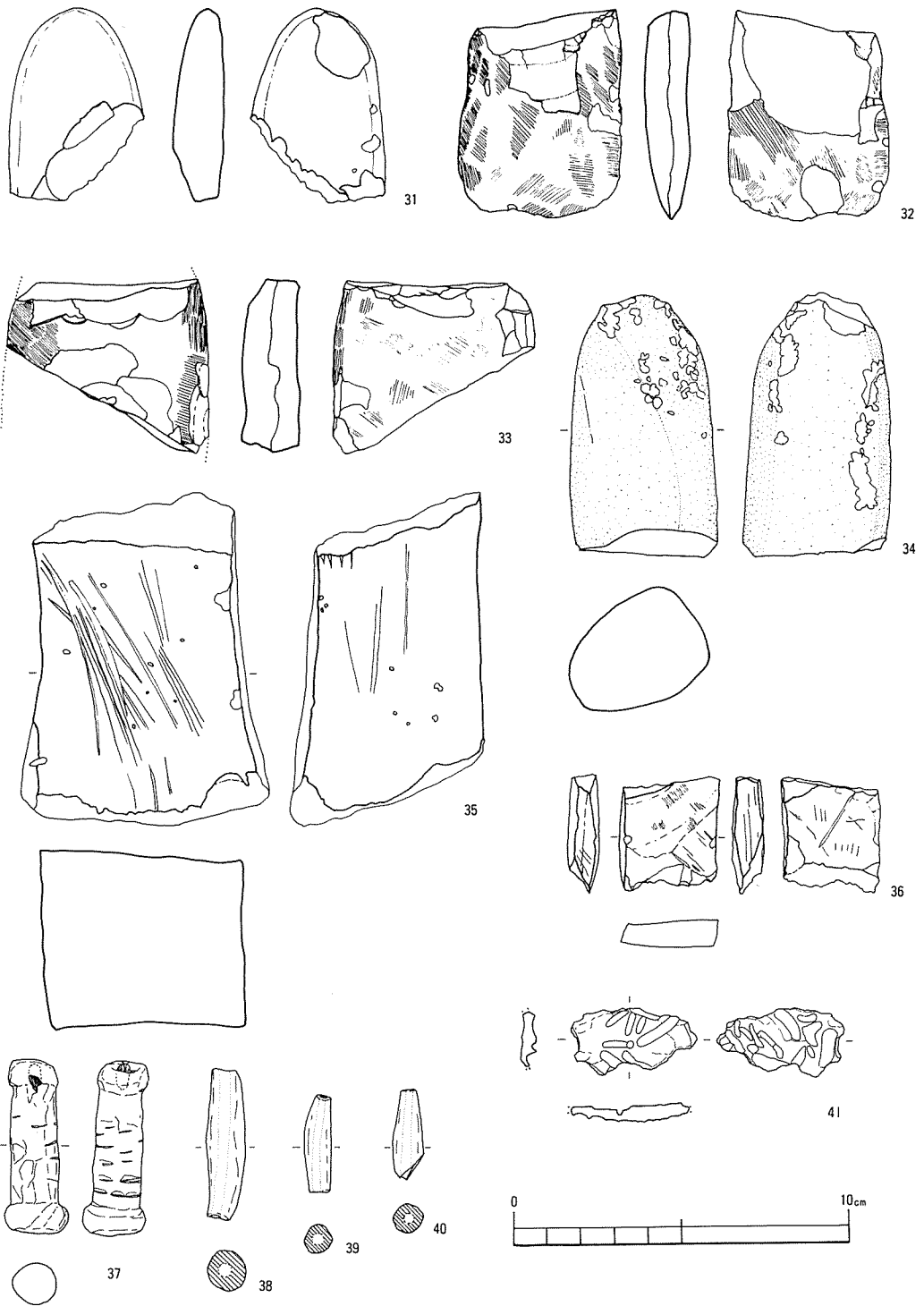
第19图 出土石器实测图(2)



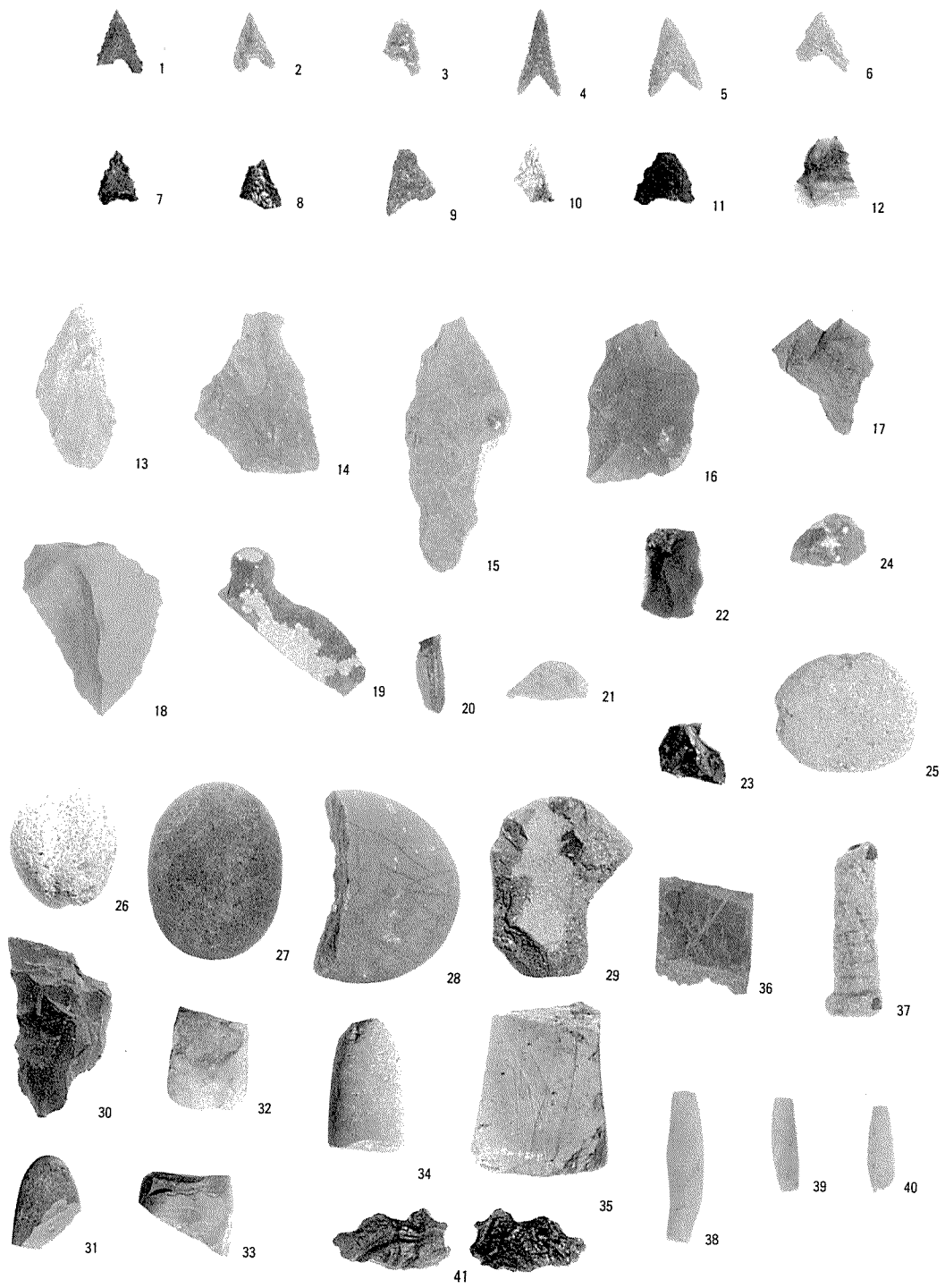
第20图 出土石器实测图(3)



第21图 出土石器实测图(4)



第22図 出土石器実測図(5)他



图版17 出土石器他

第4表 出土石器・その他の遺物観察表

No.	種類	石質	出土地	備考
1	石 鍬	サヌカイト	5 T-1号貯蔵穴(4図-20層)	ドングリ直上
2	〃	頁岩	5 T中層(4図-18層)	
3	〃	姫島黒曜石(?)	〃 (5図-20層)	
4	〃	チャート	〃 (4図-17層)	
5	〃	頁岩	〃 (〃)	
6	〃	頁岩	〃 (5図-21層)	
7	〃	黒曜石	〃 (5図-20層)	
8	〃	チャート	〃 (5図-21層)	
9	〃	頁岩		
10	〃	チャート	5 T中層(4図-18層)	
11	〃	チャート	〃 (5図-21層)	
12	〃	チャート	〃 (5図-22層)	
13	ポイント	頁岩	〃 (〃)	
14	石 匙	サヌカイト	〃 (〃)	
15	削 器	頁岩	〃 (5図-21層)	
16	〃	サヌカイト	〃 (4図-19層)	
17	石 錘	サヌカイト	5 T-2号貯蔵穴(5図-26層)	
18	削 器	チャート	〃 (4図-17層)	
19	石 匙	チャート	9 T	
20	二次加工剥片・ 使用痕剥片	チャート	5 T中層(5図-20層)	
21	〃	頁岩	〃 (5図-21層)	
22	〃	チャート	〃 (4図-18層)	
23	〃	チャート	〃 (5図-20層)	
24	〃	チャート	〃 (5図-21層)	
25	石 錘		〃 (〃)	
26	石 錘		5 T-4号貯蔵穴	
27	磨 石	砂岩	表採	
28	〃	砂岩	5 T中層(5図-22層)	
29	礫 器	安山岩	5 T上層	
30	石核石器	サヌカイト	5 T中層(5図-20層)	
31	磨製石斧	安山岩	9 T	
32	〃	安山岩		
33	〃	安山岩	5 T-1号貯蔵穴(4図-17層)	
34	〃	安山岩	5 T中層(5図-22層)	
35	砥 石	砂岩	9 T	中世
36	用途不明石製品	粘板岩		中世?
37	用途不明石製品	滑石	9 T	
38	土 錘			中世
39	〃			中世
40	〃			中世
41	用途不明木製品		5 T-1号貯蔵穴(4図-20層)	ドングリ中

(3) 木製品

木製品片は1号貯蔵穴内のドングリ・木葉・枝等に混じって出土した。その周囲は全て欠けているので全体の形状は不明である。また、その大きさは、3.7cm×2.0cm×4.5mmを測る。表面の中央に刺突状の凹点、その周囲に幅2～3mm、深さ2mm程度で長さ5mm～15mmの沈線状の装飾と思われる加工がある。裏面は削りだした面をそのまま残す。樹種は不明。 (木下)

4. 植物遺体

〈渡辺 誠〉

(1) 植物遺体のリスト

熊本県宇土市西岡台貝塚より出土した植物遺体は、縄文時代前期後半の曾畑・轟B式土器に伴う5基の貯蔵穴より検出されたものである。今回筆者に調査の機会を与えられた資料は、このうちの第1号貯蔵穴より検出されたものの一部である。低地より検出されたため、保存状態は良好である。

それらの植物遺体の種類は、次の8種類の木本類種子である（図版25）。

- | | |
|-------------------|--|
| 1. ブナ科コナラ属イチイガシ | ○ <i>Quercus gilva</i> ● Blume |
| 2. ブナ科コナラ属アカガシ | ○ <i>Quercus acuta</i> ● Thunberg |
| 3. ブナ科コナラ属シラカシ | ○ <i>Quercus myrsinaefolia</i> ● Blume |
| 4. クスノキ科クスノキ属クスノキ | ○ <i>Cinnamomum Camphora</i> ● (L.) Presl |
| 5. ミカン科サンショウ | ○ <i>Zanthoxylum piperitum</i> ● DC. |
| 6. センダン科センダン | ○ <i>Melia Azedarach</i> ● L. ovar subtripinata
● <i>Miquel</i> |
| 7. ブドウ科ブドウ属の一種 | Vitis. sp. |
| 8. エゴノキ科エゴノキ | ○ <i>Styrax japonica</i> ● Sieb. et Zucc. |

このほかに不明の3種（3点）がある。

(2) 種子類の量的構成

筆者の調査した資料は、約3.4ℓの容器に入れて送付されたものであり、その点数と比率は第5表に示すとおりである。いわゆるドングリ類であるコナラ属の3種が圧倒的に多く、また、それらの同定に当たって重要な花被や、その下部の部分の遺存状態の悪い者も含めると96%に達し、本資料の主体は殆どコナラ属に限定され、他の5種は混入したものとみなされる。特にクスノキ・センダン・エゴノキの3種には食用価値がないのであるから、混入であることは明らかである。しかしその硬化した状態は、その時期が秋であることを示唆しており、コナラ属の貯蔵時期をこれからも知ることができる。

なお、サンショウは香辛料として利用される。またブドウ属は数種が含まれる漿果である。

(3) ドングリ類の分類

ドングリ類には種類が多く、森林帯によってもその種類を異にしている。そしてその食用化

に際しては、全くアク抜きのないシイ類（D類）、水さらしを必要とするカシ類（C類）、および水さらしに加えて加熱処理の必要なナラ類（B類）とがあり、我が国では殆ど食用化されていないクヌギ類（A類）についても韓国の場合からみるとC類と同様に水さらしだけで食用化することができる。したがってアク抜きの必要の有無とその手間の度合いとによって、D類、C類・A類、B類とに大別することができる。なお、カシ類のうちイチイガシのみはアク抜きを必要とせず、D類に含まれることに注目される（第6表）。

本資料にはA・B類と、イチイガシを除くD類のドングリは含まれていない。穀斗にもこれが反映しており、カシ類の穀斗のみが6点含まれている（図版25-4）。

種の同定の可能な198点に限定してその構成比を見てみると、アク抜きを必要とせず、カシ類のなかでは唯一D類に含まれるイチイガシが77.3%を占め、他に水さらしによるアク抜きを必要とするアカガシが14.1%、シラカシが8.6%を占めている。約4分の3はアク抜き不必要な種類ということになる。

アク抜きを必要とする種類と必要としない種類とが混在していることは、どのように理解すべきであろうか。考えられる場合の第1は、イチイガシの採集に当たって、アク抜きの必要な種類をも採集してしまった場合である。それらの葉は区別し易いが、種子での区別は難しい。第2は、若干の混入を承知のうえで採集している場合である。そして食べる時には、アク抜きとは無関係に煮て食べることが推定され、結果的にアカガシやシラカシのアク抜きも行われたと考える場合である。製粉用具その他の問題を多角的に検討しないと結論は出しにくい、後者の可能性の方が高いと考えられる。

(4) 若干の検討

筆者は、従来アク抜き技術出現の上限を東日本では縄文前期、西日本では同後期からとしていた。しかし先年鹿児島県曾於郡志布志町東黒土田遺跡より検出された、縄文草創期の貯蔵穴出土のドングリを調査させて頂き、それらがイチイガシやD類のドングリ類ではないことを確認した。ただしこれは従来の知見を大幅に遡ることになるため、慎重に対処せざるを得なかったのである。ところが近年韓国でも最古の土器にドングリが伴出し、しかもそれはアク抜きを必要とする種類らしいことが明らかになってきた。その上西日本において、たとえば鹿児島県曾於郡松山町前谷遺跡のように、アク抜きを必要とするドングリ類を出土した前期の確実な資料で明らかになってきた。前～中期の本遺跡の例も、この新見解を支持してくれる重要な資料であるということができる。

なお低地の貯蔵をあく抜きのためとする見解をしばしば各地の報告書でみかけるが、これは誤りである。正しくは冬期における短期の生貯蔵を示しているのである。長期の場合はよく乾燥させて屋根裏などに貯蔵するのであり、乾燥させてしまうと後の処理が面倒になるため、そ

の冬にたべるもののみは生のままで貯蔵するのである。実際従来¹⁾の報告例をみると、多くの場合アク抜き不要のイチイガシが貯蔵されているのである。

したがってとり出されずに遺存した本遺跡の貯蔵穴は、本遺跡の継続期間のうちでもっとも新しい時期に属するものと推定される。

謝 辞

終わりに、本資料調査の機会を与えて下さった宇土市教育委員会の高木恭二・木下洋介の両氏、熊本県教育委員会の松本健郎氏、および資料整理に御協力下さった田中禎子嬢（名古屋大学文学部学生）に対し、深謝の意を表する次第である。

参考文献

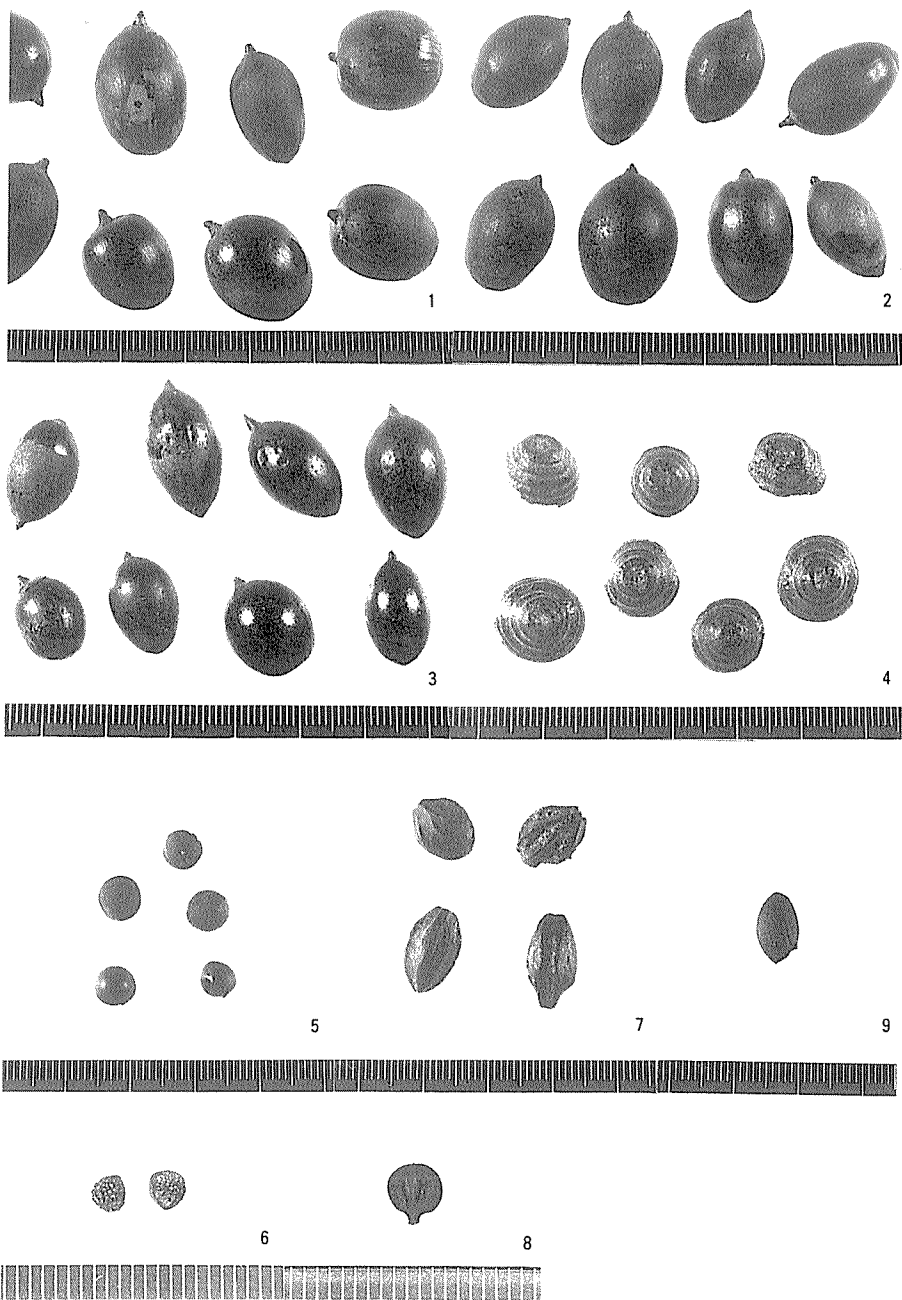
- 瀬戸口望 1981：東黒土田遺跡発掘調査報告。鹿児島考古、15.22～54頁。鹿児島。
- 渡辺 誠 1986予定：植物遺体。松山町埋蔵文化財調査報告書、1. 付篇。鹿児島県松山町。
1986予定：韓国におけるドングリ食。名古屋大学文学部研究論集、史学32.1～19頁。
名古屋。

第5表 種子類数量表

種 名	数	%
イチイガシ	153	30.1
アカガシ	28	5.5
シラカシ	17	3.3
コナラ属	290	57.1
クスノキ	8	1.6
サンショウ	2	0.4
センダン	5	1.0
ブドウ属	1	0.2
エゴノキ	1	0.2
不 明	3	0.6
計	508	100.0

第6表 ドングリ類の分類

民俗分類	属		種	森林帯	他の堅果類
A. クヌギ類 アク抜き伝承の途絶えたもの	コナラ亜属	コナラ属	クヌギ アベマキ	落葉広葉樹林帯 (東北日本)	オニグルミ クリ トチノキ
B. ナラ類 水さらし+加熱処理			ミズナラ コナラ		
C. カシ類 水さらしのみ	アカガシ亜属		アカガミ アラカシ シラカシなど	照葉樹林帯 (西南日本)	
D. シイ類 アク抜き不用	シイノキ属		イチイガシ		
	マテバシイ属	ツブラジイ スタジイ			
			マテバシイ		



植物遺体 1：イチイガシ、2：アカガシ、3：シラカシ、4：アカガシ亜属殻斗、
 5：クスノキ、6：サンショウ、7：センダン、8：ブドウ属、9：エゴノキ
 (スケールの単位はmm)。

図版18 出土植物遺体

IV ま と め

西岡台貝塚の調査は農業用水路の改修に伴う事前調査であるが、工事施行の範囲が貝塚の末端に当たるために貝殻の分布は殆ど見られず、また、城郭に伴う破壊によって、縄文時代の遺構は殆ど存在しないであろうと考えられた。実際、調査の始めのころには遺構の検出はなく、貝層も2次的な堆積で、良好な層は期待できなかったのである。むしろ、城郭に伴う中世の遺構がどれほど残っているかに期待を残すことになった。

ところが、5 Tの発掘が進み、遺構が殆ど存在しないだろうと思われた地表下約1.9mの深さになって、堅果類の貯蔵穴を検出した。検出面の海拔標高は約2.5mであり、用水路工事の基礎工の最下面より約1 m下部にあたる。しかも、平面的にも水路からは微妙にずれる事になり、将来、史跡整備の段階で貯蔵穴の遺構表示も可能な位置である。

検出された貯蔵穴の位置は湧水が多く、水分が常になくならない所に掘削されたものと思われる、堅果類の保存・処理を考える上で重要な意味を持つ。各貯蔵穴の量量は第1表の通りであり、円と楕円の2種類の平面形態をなし、断面形は袋状・円筒状・皿状の3種ある。大きさは2号の145cm×105cmを最大に、最小は3号の75cm×55cmである。これまで検出されている他の縄文期の同種の貯蔵穴に近い大きさである。

出土土器は8類21種に分類でき、貯蔵穴から検出されたものは微量ながら轟B・C式土器に限られ、これを覆う層から轟B・C式土器・曾畑式土器・船元式土器が多く検出されている。このことからみれば、貯蔵穴の時期は縄文時代前期の所産とみることが出来るが、前期でも中期にかかることも充分考えられる。船元式土器は、熊本地方では竹崎式土器と呼ばれるものに共通する。しかし、この竹崎式は乙益重隆氏が簡単な型式設定⁽¹⁾をなされている程度であり、その詳細な分類は必ずしも確立していないようである。その意味でこの竹崎式の型式名を使用することはひかえ、分類がかなりすすんでいる船元式⁽²⁾の名を用いる事にした。

堅果類は1号貯蔵穴に最も大量に検出され、そのうちから無作為に抽出したものの植物学的分析を渡辺誠氏にお願いし、その詳細をIII-4に掲載させていただいた。それによると、96%がドングリ類のコナラ属であり、その他の4%は混入であると見られる。最も多いのが30.1%のイチイガシ、次で5.5%のアカガシ、3.3%のシラカシなどで、種はわからないがこの他にも57.1%のコナラ属が確認出来る。つまり、1号貯蔵穴はコナラ属ドングリを貯蔵したものである。渡辺氏によると、1号の堅果類は、アク抜き不要なイチイガシと、水さらしによるアク抜きが必要なアカガシ・シラカシが混在しているという。1号の全堅果類と1号以外の4基の貯蔵穴の分析については機会を得て明らかに出来ればと考えており、今後委ねざるを得ない。しかし1号以外の4基の堅果類の総量は極めて少ない。

今回の堅果類貯蔵穴の調査によって、これまで明らかに出来なかった植物類食料の実体⁽³⁾を明らかに出来た意義は大きい。というのは、以前の調査によって貝類のブロックサンプリングを実施して貝塚を構成する貝類の構成比⁽⁴⁾が明らかになっており、これと合わせて当時の二大食料源であったタンパク源・エネルギー源の様相を知ることが出来るようになった。類例が増加することによってより詳細な内容が明らかに出来ることを期待するが、本貝塚においては魚骨・獣骨の実体を明らかにするという作業が残っている。

この貝塚の特徴を語るのに忘れる事が出来ないのは、西方約60mに位置する轟貝塚との関係であろう。九州における縄文時代前期の代表的標式遺跡となっている轟貝塚⁽⁵⁾は、縄文時代の早期から後期にかけて営まれた東西150m・南北100mにわたって貝類の散布をみる大貝塚で、居住地域を含めるとかなりの広さになり、大まかな土器型式の分類からいえば西岡台貝塚と並行関係にある。両貝塚出土遺物の微細な比較検討によっては、この二つの貝塚が同時併存した親村・子村の関係、いわば分村のようなものであったのか、それとも同一集団が時期・季節によって住居を異にして出来たものかなどを明らかに出来るようになるものと思われる。更には、二つの貝塚の比較だけではなく、周辺の縄文時代貝塚・遺跡の詳細な研究によって、各遺跡集団のテリトリーや交流の実体を明らかにしていくことも必要であろう。 (高木・木下)

註

- (1) 乙益重隆「縄文文化の発展と地域性 九州西北部」『日本の考古学』2、河出書房新社、1965年。
- (2) 間壁忠彦・葎子「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第7号、1971年。
- (3) 渡辺誠『縄文時代の植物食』雄山閣出版、1975年。
- (4) 山崎純男「九州地方における貝塚研究の諸問題—特に自然遺物(貝類)について—」『九州考古学の諸問題』東出版、1975年。
平山修一・高木恭二「宇土城跡(西岡台)」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第1集、1977年。
- (5) 浜田耕作・榊原政職「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第5冊、1920年。
松本雅明・富樫卯三郎「轟式土器の編年」『考古学雑誌』第47巻第3号、1961年。

西岡台貝塚

宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集

昭和60年3月31日

発行 宇土市教育委員会
熊本県宇土市浦田町51番地

印刷 (資) 下田印刷

